
クレッシェンテお題短編集

高里奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレッシェンテお題短編集

【Nコード】

N5389W

【作者名】

高里奏

【あらすじ】

クレッシェンテシリーズの短編集です。全て新作。全てお題消化。今更に。及び君と僕の四百年からの絡みも若干ありますがそちらを読まなくても分かる内容と思います。

言葉の代わりに、君に刃を（前書き）

この連載は全てお題を元に作った短編集です。

極力お題の順番どおりに表示できるように割り込み投稿等もありますが、どこから読んでも読みきりになるように努力します。

歪んだあなたへの100題

配布元

<http://farfalla.xo.to/>

追憶の苑

言葉の代わりに、君に刃を

「カトラスA、君を逮捕する」

凜とした声と同時に振りかざされる刃。

「ハハン、出来るものならしてみなさい」

生意気な宮廷騎士団長は鋭い目で僕を見る。

それがなんとも滑稽だ。

「本当に、さつさとくたばれよ」

目つきだけではなく、口まで悪いこの宮廷騎士団長はいつだって僕の首を狙っている。

「随分嫌われたものですね」

「僕の感情なんてどうでもいい。陛下のお言葉こそが全て」

若き宮廷騎士団長ユリウスは言葉とは裏腹に斬撃で憎悪と殺意を顕にする。

「僕は、貴方が嫌いではありませんがねえ。若くして騎士団長。強く優秀で何よりも生意気だ。壊したくなりますよ」

短剣で斬撃を防げば舌打ちが聞こえる。

充滿する殺気。

「罪状は不敬罪、王族詐欺罪、公務執行妨害そして、僕の部下を誑かした」

「誑かされる方が悪いでしょう？」

どうせあの白い番犬のことだ。

彼女はとても気高く優秀だが、少しばかり生真面目すぎる。

「気でも狂いましたか？」

中々洗脳は出来なくとも、発狂くらいならさせれるかもしれない。

「すっかり腑抜けになって今頃病室でレースでも編んでいるよ」

再び斬撃。

それを流せば今度は手錠が飛んでくる。

「君は公開処刑って決まってるからね。厄介なことに」

「ハハン、それは興味深い。ですが、今日は貴方の相手をする時間はありませんよ」

蓮香の香に幻術を混ぜる。

忌々しい兄の術だが姿くらましにこれほど使いやすい術も無い。

「また会いましょう。ユリウス。今度はゆっくり決着を」

「待て！」

飛んでくる鎖を杖で弾く。

濃霧に紛れ込めば、最早ユリウスの姿さえも見えない。

「少しは楽しめましたよ」

言葉と同時にナイフを投げれば弾き飛ばす音がする。

そして、それきり。

相手の気配さえ感じ取れないほど遠くの人混みに紛れてしまえば。

もう、幼い騎士団長の溜息さえも聞こえることはない。

痛みを伴う

出逢いとは必ず離別を伴うものであり、希望があれば絶望があり、喜びがあれば悲しみがあるのが世の常である。

「シルバ、見て。ちゃんと一人で殺せたよ」

血まみれの玻璃が嬉しそうに標的の首を抱きしめて掛けてくる。

これはこれで複雑な心境だ。

先輩として、師として、同僚としていや、全て暗殺者としての視点からすれば大変喜ばしいことであると同時にはしゃいで回りに見つかるとあることを叱るべきだろう。

だが、身内として、彼女の兄代わりと言う奇妙な立場からすれば、大切な妹分に手を汚させたくないと言う妙な想いが生まれる。

「よくやったね」

迷った結果出た言葉と一緒に頭を撫でてやれば玻璃は嬉しそうに目を細める。

「汚いから捨てておいで。玻璃には似合わない。それに大きすぎる」

まだ八つの玻璃にしてみれば大人の男の生首は重かるうに、彼女は幸せそうにそれを抱えている。

「平気。マスターに見せなきゃ」

「いいよ。玻璃が頑張ったことは俺がマスターに言っておくから」

この幼い少女にあまり長くそう言ったものを持たせたくない。いや、玻璃がそんな穢れたものを持つ姿を見たくない。

けれどもこの子は将来とても優秀な暗殺者になるだろう。ナイフの使い方はマスターに通じるものがある。

何より殺すことに対する躊躇いが無い。それが何より大きい。

「玻璃は凄いのよ」

「本当？」

「ああ」

さっきの標的は誰かの親で誰かの息子で誰かの夫で誰かにとってはとても大切な相手だった。

けれども我々にとってはどうでもいい。全くの他人。

玻璃も私もあの男に怨みなんてちつとも無い。殺す理由は金。それと玻璃の場合は大人からの評価。

それ以外は何も無い。

けれどもあの男は殺される。自分が何故殺されるのかも分からないまま死んで行った。

それも幼い少女の手によって。

「玻璃は凄い」

もう一度言つてやれば本当に嬉しそうに笑う。

無邪気な子供。

何れこの子は死神と呼ばれるだろう。

かつてセシリオ・アゲロが赤い死神と呼ばれたように。そうして、この子こそが次の恐怖の代名詞になる。

そうして歴史が作られていく。

「銀の剣士が活躍できなくなりそうだ」

「え？」

「俺の出番が無いほど玻璃は頑張ってるってことだよ」

結局甘い。

あの他人の死なんて気にならないのは私も同じだ。

ただ、妹のような、娘のようなこの子が愛おしい。

そうして、いつまでもこの成長を見たいと思ってしまう。

たとえ、未来に私の居場所が無くとも、愛しい少女が死神になり、やがて恐怖そのものになるときを望むのだろう。

傷つけて、傷ついて

僕は生まれつき欠陥品だったのかもしれない。
欲すれば欲するほど、愛すれば愛するほどに壊したくなる。

「……もう、終わりですか？」

床で赤く染まっていく彼女に声を掛ける。

ヒューっと呼吸する音がするだけで、彼女は何も答えない。

「ずっと僕の傍にいてくれるのではなかったのですか？」

普通の人間なら、こういったときにどんな反応をするのだろう。

もしかしたら泣くのかもしれないし、怒るのかもしれない。

醜く縊るのかもしれない。

けれども僕は何も感じない。

ただ、彼女を見据えて、終わりを待っている。

「死ぬのですか？」

怯えたような目が見る。

けれども、彼女は何も言わず、ただ呼吸するだけ。

そうして赤く染まっていく。

「答えたくないのですか？ それとも、答えられないのですか？」

分からない。

その感覚が理解できない。

僕は決して死ぬことのない化け物。けれども彼女は普通の人間だ

った。

「もう、聞こえていないのですか？」

その問いにさえ、返事無く、弱りきった呼吸音が止まる。

「サラス？」

そつと彼女に近づいて、胸元に耳をあて心音を確認する。
音は無い。

さっきまでの苦しそうな呼吸音も、聞こえるはずの心音も何も無い。

ただ、赤が広がって、僕自身もその色に染まりつつある。

「終わり、ですね」

やはり僕は欠陥品だ。

人間と言うのは、大切なものが傷ついたり弱ったりしたら悲しんだり怒ったりするようだけれども、僕にはそれが無い。

「理解できませんでした。貴女を失っても」

愛していたはずだ。彼女を。

将来を誓い合ったはずの女性。
けれども僕は壊したかった。

愛しいはずの彼女を。

壊せば理解できるはずだった。
けれども。

「何もあります。もう、何も」

全て終わってしまった。

退屈しのぎの夢も、未来も。

そうして、僕には再び退屈が訪れるだけだ。

汚れた包帯

「いてっ……」

「我慢しなさい。また喧嘩なんてしてくるからよ」

説教を始めようとする朔夜には敵わない。

絶対マスターだって今の朔夜には勝てないだろう。

「女の子が顔に傷なんてダメでしょう。何をやったらこんなことになるのよ」

「喧嘩じゃねーよ。ジルの奴が出会い頭にいきなり切りかかってくるからよ、ちよっとひと勝負っつかさ」

「それがダメなんですよ！ 全く、任務意外で怪我してどうするのよ」

朔夜は深い溜息を吐く。

思ったより傷が深かったらしい。血が止まらず、朔夜が止血魔法を掛け始める。

「そのまま傷塞いでくんね？」

「ダメよ。そんなことしたら瑠璃ちゃんまたすぐ喧嘩するでしょ。傷にからしでも塗っておこうかしら」

「勘弁してくれよ」

朔夜が言っていると冗談に聞こえないのが怖い。

「瑠璃ちゃん」

「ん？」

「貴女、少しは自覚して頂戴。女の子なんだから」

朔夜の手のひらが頬を包む。

温かい。

「心配しているのよ。凄く」

「……悪かった」

朔夜とは全くの血のつながりも無い。

ただ、マスターに拾われた時に、たまたま一緒にいたから、あの日から姉妹になった。ただそれだけだった。

そのはずなのに妙に馴れ合って、一緒にいるのが当たり前で、当たり前のように心配して世話を焼いてくれる朔夜。

姉貴と言うよりは母親のようだ。

実際、今の朔夜は母であり姉である妙な位置にいる。

そのせいだろうか。朔夜には敵わない。

勝てる気がしない。それは力ではなく精神で。

「朔夜の手、温かい」

「そうかしら？」

「すげえ温かい」

母さんの手がどんなのかは知らない。

けれども、こんなにも温かい手ではなかったと思う。

私たちを捨てた母親はきつと冷たい手をしていたに違いない。

「……ありがとう」

「え？」

頬に触れていた朔夜の手を掴んで言えば、驚かれたようだ。

「……悪かった、心配掛けて……」

「……瑠璃ちゃん……いいのよ。私が勝手に心配しているだけだから。瑠璃ちゃんが強いことくらい知ってるわ。だから、死んじやつたりとかそう言ったことは心配してないの。でも、傷が残ったら、とか思うと、ねえ。折角可愛い顔してるんだから」

そういう朔夜は世話焼きのおばさんの様でもあるから不思議だ。

「朔夜」

「な、なあに？」

すっかり血で汚れてしまった包帯を取り替えている朔夜を真っ直ぐ見つめてみる。

「可愛いよ」

「はい？」

案の定驚いて慌てだす。

うん。可愛い。

朔夜は私なんかよりずっと可愛い。

「きゅ、急に何を言うの!」

「いや、なんか可愛いなって思っただけ。嫁さん貰うなら朔夜みたいな人かなってさ」

「……瑠璃ちゃん、お嫁さん貰うの?」

「いや、嫁に行くよりは嫁が欲しいっつーか、まあ、今のところはカルメンで良いや」

「……そ、そう」

おどおどしだす朔夜が本当に可愛く思える。

「いてっ、傷口に指入れるな!」

「あ、ごめんなさい」

手当てしてもらって悪化したら洒落にならない。

けど、朔夜の少し抜けたところも嫌いじゃない。

なんだかんだ言って、結局朔夜のこと好きなんだよなとか自覚した自分がなんとも可笑しく思えた。

あなたの心を切り取って

「また来たの？」

呆れた人。

女なんか興味ないくせに、この男は毎夜のようにここに来る。

「金は払っている。文句を言われる理由がありませんよ」

本当に、この男の頭の中を覗いてみたい。

「それこそ無駄遣いって奴だ」

この男ほど金があれば私はこんな場所にはいない。
祖国の家族のもとに帰って不自由なく生活できる。

けれど、この男はありすぎる金を弄んでいる。

「私にはアンタが理解できないよ」

「理解されたいとは思いません」

そう言って、男は私を押し倒し、ただ、枕のように扱う。

「……私はヴィオーラ伯のウサギじゃないんだよ」

幼い子供の象徴。幼い伯爵のウサギの人形。自分を護るための物。
執着の対象。

「何です？ この僕が子供だとでも」

「ああ、その通りさ。私はアンタの母親でも安心人形でもない」
そう、娼婦と客。この男とはそう言った関係のはずだ。
なのに。

この男は大金を積んで私を買い、ただ、人形のように扱う。

この男は眠るためにこの空間を買い取るのだ。

「嫌な男」

「黙りなさい」

「アンタ、恋人いないわけ？」

「必要ありません」

「恋人でなくてもいいわ。早く嫁でも貰ったら？」

こういうのは私の役目じゃない。

分かっている。

「必要ありません。何故貴女にそんなことを言われなくてはいけないのです？」

不満そうに言って、男は目を閉じる。

「さあね」

大嫌い。

こんな男。

「ただ、アンタの目に私が映っていないって事は、つまり私にとって屈辱ってことだよ」

そう、娼婦への侮辱。

そうとしか思えない。

「アンタ、最低だ」

「良い響きです」

男はそれだけ言って眠り始める。

今日もこの男は大金を積んで安眠を買うのだ。

「全く、憎たらしい憐れな男だね」

本当に、心の中を見たい。

けれども、それは誰にも許されないことだ。

赤い傷跡

この長い爪は自分を護る棘。

そして、この口から出る呪いの言葉もまた。攻撃にも、守りにもなってしまう。

「いらつしゃい」

店内に入ってきた赤毛の子に声を掛ける。

「今日はどんな用かしら？」

「……」

彼は黙り込む。

そして何かを少し考え込んだ。

「どうしたの？ 貴方らしくないわ」

いつも用件だけ言って直ぐに帰るこの子が黙り込むなんて。

「その……」

「なあに？」

「貴女は……その……子育てをしたことがありますか？」

「え？」

思わず聞き返した。

一体何故そんなことを訊かれるのだろう。

「ですから……」

「いえ、聞こえたわ。あるわよ。そりゃあ私は何百年も生きているもの。子供の一人二人、十人二十人面倒を見たわ。貴方の友人だつて、私が何百年か世話をしたのだし」

そう、この子の悪友ともいえるあの子は私の弟子。

子育ては慣れている。はずだ。最後がたまたまあの子で、少し捻くれて育ってしまっただけ。

「では、とても慣れていると解釈して良いのですね？」

「まあ、少なくとも貴方よりはずっと慣れているわ」

一体どうしてこの子はそんなことをいうのだろう。

まだ結婚もしていないはずなのに、子育てを聞きたがるなんて。

「実は、子供を拾ったんです」

「え？」

「女の子を三人。全ての世話が必要なほど幼くはありませんが、全て放って置けるほど大人でもない。女の子が三人です」

どうしていいかわかりませんと彼は言う。

「女の子？　いくつくらいなの？」

「一番上はもうすぐ六つだと言っていました。後の二人は三つです」
赤毛の彼は髪程は赤くないが、どこか血を連想させる瞳で私の目を覗く。

「それで？　その子たちは？」

「アジトにいます。部屋と窓に鍵を掛けてとりあえずは外に逃げ出さないように」

「……セシリオ、それ、保護じゃなくて監禁よ？　親は子供にそんなことをしないわ」

「そうですね？　すみません。僕は親と言うものを理解できないので。でも、猫を飼うとき、出かけるときは小屋に鍵を掛けるのでは？　鳥を飼うときだって、籠に鍵を掛けるでしょう？」

「子供は違うのよ」

先が思いやられる。

けれども、この子なりに子供たちを愛そうとしているのだろう。

「それで？　どんな子達？」

「そうですね、一番上はおとなしいながらもしつかりと他の二人の面倒を見ています。今まで、あの子がスリを働いて他の子達を食べさせてきたようです。もっとも、二番目のじゃじゃ馬娘はスリどころか大人を気絶させ金品を奪っていたようですが……」

呆れたように、それでいてどこか面白そうに彼は言う。

「末の子は何を考えているのか分かりません。ただ、どこか虚ろで何かにずっと怯えているようでちっとも口を利きません。けれど、そうですね。何か、才能を感じます。あの子を鍛えればきっとこの国で、いえ、全世界で尤も優秀な暗殺者になれる筈です」

「まあ」

この子に其処まで言わせる子だ。
会ってみたい。

「今度連れていらっしやい。それが今回の対価よ」

「しっかり対価は取るんですね」

「そう、これは商売だもの。そうね、上の子は読み書きは出来るのかしら？」

「いいえ、全く。全くでもありませんか。大人の真似で看板程度なら読むことが出来るようです」

「そう。だったら、ちゃんと食べ物を入れて、温かい寝床と清潔な衣服をあげて、読み書きを教えてあげなさい」

「生活の提供と読み書きの指導ですか？」

「ええ、表面上はそれっぽく見えるんじゃないかしら？」

この子はまず形から入らなきゃダメ。

「それっぽく見える、ですか？」

「だって、愛情とかそういう話をしてても理解できないでしょう？」

「まあ、理解したいとも思えませんがねえ」

本当に、捻くれた子。

「大丈夫よ。形が出来れば子供達が教えてくれるわ」

子供達の方が理解できている。

そう感じる。

「貴方に閉じ込められて文句一つ言わないのでしょうか？」

「末の子は怯えているだけかもしれませんが、下の子は少し暴れましたね。力で適わないと分かれば不満そうな顔をしました。上の子は……一番上の子は、驚いたことに微笑みました」

「まあ」

「微笑んで「いつてらっしやい、早く帰ってきて下さいね」とそう言っただんです。下の子なんて隙あれば逃げ出そうとたくらんでいるのに」

「まあ、変わった子ね。生まれ持ったものかしら？」

それとも、深い傷を負っているからかしら？

もしかすると、その子はとても賢くて、セシリオを利用しようと考えているのかもしれない。

「お土産を買って帰ったら？ 喜ぶかもしれないわ」

「そうですね？ 僕の経験上、知らない相手から何かを受け取るということはまず相手を疑います。特に、子供の場合大人は酷いことをするとか考えませんからね」

「そう、だったわね」

そう、この子もまた深い傷を持っていた。

「今度その子達を連れていらっしや」

「ええ」

セシリオは店を出ようとする。

「あ、待つて」

「何です？」

「忘れていたわ。その子達、名前はあるの？」

「ええ、ちゃんと持っていましたよ」

その言葉に驚く。

それと同時に安心して、彼を見送った。

喉元に突きつけられたナイフ

「死んで頂戴、セシリオ」

喉元にひんやりとした感触。

驚いて振り向くと、朔夜の姿があった。

深夜、目が覚める。

夢か。

いや、当然だ。

朔夜は僕をセシリオとは呼ばないし、なにより、僕の知る朔夜はつい先月に十歳になったばかりの子供だ。

夢に出てきたのは子供と言うよりは少し大人びた少女。いや、少女と言うよりすでに女性と呼ぶべきであろう姿だった。

「こんなに甘えん坊の朔夜が僕に牙を剥くなど……考えられませんね」

腕の中で蹲っている子供を見る。

いつの間にか勝手に部屋に入り込んで寝台に潜り込む。

玻璃もよく来るが、意外にも一番多くここに訪れるのは朔夜だ。

「また悪い夢でも見ましたか？」

頭を撫でて安らかな寝息に変化は無い。

悪い夢を見たのは僕だ。

そう、悪い夢。

飼い犬に手を噛まれるようなことがあってはならない。

実際、僕ならば朔夜に背後を取らせることは無いだろう。

何故夢の中の僕はあそこまで弱かったのか。

これは僕の力の衰えでも暗示しているのだろうか。

「馬鹿馬鹿しい……」

そつと朔夜を抱きしめ直し、瞼を閉じる。

子供の体温と言うのは温かい。

いや、むしろ熱い。

直ぐに追い出したい気分になったが気持ちよさそうに眠っている姿を見て其処までするほどの娘を嫌ってはいない。

これがどこの誰だか知らない香水臭い女だったりしたら直ぐに殺してそこらに捨てるものだが、自分の養女^{むすめ}ともなると話は変わる。

僕も随分甘くなったものだ。

「まあ、夜に寝台にいること事態が不思議なんですけどね」

子供達の教育には生活を改めるだの魔女に口うるさく言われたせいか、夜の仕事が随分と減ってしまった。

まあ、生活に困るほどではないが、腕が鈍りそうだ。

そろそろこの子達も実践に使えるだろうか。そろそろ復帰したい頃だ。

「……マスター？」

眠たそつに目を擦った朔夜が起き上がる。

「おや？ 起きてしまいましたか」

「どうしました？」

「いいえ、何も」

可愛い子だ。

いや、怯えているだけだろうか。

何時だって僕の様子を伺う。

「眠って良いですよ」

「はい」

そう返事をして朔夜が眠る気配は無い。

丸い鳶色の瞳がじっと見つめる。

「……なんです？」

「いえ」

特に言いたいことも無いくせにじっと見つめることに意味はあるのだろうか。

「言いたいことがあるならはっきりと言いなさい」

「何もありません」

「なら寝なさい」

「はい」

そう、返事をするくせに朔夜は目を閉じない。

「朔夜」

「眠れません」

「は？」

「目が覚めてしまいました」

朔夜はそう言って微笑む。

「怖い夢でも見ましたか？」

からかうようにそう言えば、朔夜はくすりとわらって「はい」と答える。

嘘だと直ぐに分かるのに、この娘は何時だってそうだ。

「どんな夢でしたか？」

少し意地悪をしたくなった。

ただそれだけ。

けれども朔夜は微笑んで言う。

「マスターに武器を向ける夢でした」

「夢ではなく現実かもしれないよ」

「だったらなおさら怖いわ。私が殺されてしまうもの」

くすくすと笑いながら言うのは、朔夜には僕を殺すことの出来ないという絶対的な力の差による安心感と僕が朔夜を殺したりはしないという経験上の知識による根拠の無い確信があるからだろう。

「マスター」

「何です？」

「もう少しお傍に寄っても良いですか？」

控えめな甘えに見せかけて図々しい。

けれどそれが心地よい。

「構いませんよ」

そう言えば、直ぐにぴったりとくつつく。

「玻璃ちゃんがいつも言っています」

「何と？」

「人の心音が心地よいつて。マスターの心音、とっても落ち着きます」

そう言いながら、朔夜は胸に耳を当てる。

お互い、いつでも殺せる距離。

お互い、枕元に護身用のナイフがひとつ。

いつでも殺せる。

この距離なら、油断すれば殺されるかもしれない。

この距離なら、直ぐに朔夜を苦しませること無く殺せる。

けれどもお互いそんなことは無い。

そう思った瞬間、喉元に冷たい感触。

「こんな風に、マスターに武器を向ける夢でした」

「……今、現実にしたでしょう？」

防ぎきれなかった。

油断していた。

甘えん坊の娘がいつものように甘えてきた。そう思っていた。

「どうして、弾かなかったのですか？ マスターなら、そのまま直ぐに私の喉を斬れた」

不思議そうに、それでいてしっかりとナイフを握ったまま、真っ直ぐ大きな瞳が見つめる。

「おや？ 折角のチャンスなのに僕を殺さないんですか？」

「殺さないわ。母がお許しにならないもの」

朔夜はそう言ってナイフを下ろす。

「私は貴方が私を殺さない方が不思議です。マスター」
真っ直ぐ見つめる鳶色の瞳。

僕はこの瞳をよく知っている。

「父親とは家族を護るものなのでしょう？ 家族を殺したりしたら護れないじゃないですか」

「ふふっ、マスターらしいわ」

朔夜は笑って、再び僕にぴったりとくっつく。

「貴方のそういうところ、凄く変だと思うけど、結構好きです」
もう、ナイフの気配は無い。

ああ、そうだ。

この子の攻撃を防げなかったのははじめから殺気が無かったからだ。

敵意すらない。

ただ、子供がじゃれて遊ぶのと同じ。

「朔夜は将来有望ですね」

「え？」

「いえ、期待しています。瑠璃は殺しには向いていません。暗殺者に向いているのは、朔夜、貴女と玻璃です」

そう告げれば朔夜は驚いたように目を見開く。

「暗殺者？ 私が？」

「ええ、貴女が」

この子はきつと殺すことに罪悪感に苦しむだろう。そうしてどんな自分を追い詰める。

だからこそ。

この子は狂わない。

罪を感じ、必要以上に殺さない。必要なことを的確にやってのける。

「朔夜、貴女は上から指示するよりも自分の手を汚す方が得意な人間だ」

「……マスター」

「期待しています。とても」

「……」

朔夜は黙り込む。

ぴったりと僕にくつついて。

そして、縋るように、心音に耳を傾けている。

「もう寝なさい」

「はい」

「ちゃんと目を閉じて」

「はい」

「いい子です」

頭を撫でてやれば、僅かに身を振る。

「朔夜は何時までたっても子供ですね」

「……子供です」

朔夜がそう言ったことに少し驚いた。

瑠璃や玻璃は子ども扱いされることを嫌う。

朔夜は何時だって二人の面倒をよく見る【良い姉】だった。

「貴方の前でくらい子供でいさせてください」

拗ねたようにそう言う彼女に思わず笑いが込み上げる。

「そう、ですね。では、子供は寝る時間です。ちゃんと寝なさい」

「はい」

頷いた朔夜を抱き枕のように抱きしめる。

熱い。

熱いのは嫌いだ。

けれども、なぜかは分からない。

この熱さは嫌いではない気がした。

とてもささやかな苦しみを

死ねばいいのに。

消えちゃえばいいのに。

凄く痛くて苦しい思いをして、誰の記憶からも消えちゃえばいいのに。

こういうことを言っちゃダメとマスターは言う。
玻璃わたしの言葉は呪詛げんじつになるからって。

瑠璃が「大丈夫」とか「なんとかなる」とかそう言うとなんかそううなって、私が「死んじゃえ」とか「苦しめばいいのに」って言う
とそうなる。

言葉には力があるの。

でも、マスターとか、スピード・J・Aとかには通用しない。

多分、元の力のバランスの問題なんだと思う。

「ねえ、アラストル」

「ん？」

「不幸なことって何？」

偶然噴水前で会ったアラストルに訊いてみる。

私の言葉は不幸なことにしか使えない。

だから「生き返って」とか「会いたい」とか願っても使えない。

「お前、ほんとと、不吉と縁が深い奴だな」

「別に。アラストルなんかルシファーに思いつきり葡萄酒掛けられれば良いんだ。樽ごと」

「おい……お前……今俺を呪っただろ！！」

「別に」

きつと今夜アラストルの部屋に行ったら葡萄酒臭くなってるんだ。

「お前、俺に怨みでもあるのか？」

「別に。三十路に何を言われても関係ないわ」

「三十路言っな。ガキ」

「で？ 不幸なこと、何か無いの？」

「……先に聞いておく。標的は？」

「ウラーノ・ナルチーゾ」

「げっ……伯爵じゃねえかよ」

「昨日、私が朔夜の膝を独占できる日だったのに、あの人が来たから、ずつと朔夜忙しくて膝枕してもらえなかった」

「そーかー。そんなことでいちいち怨まれたら伯爵も身体がもたねえだろ」

アラストルは呆れたように言う。

「ウラーノ・ナルチーゾなんて禿げれば良いんだ。あのうっとおしい金髪、綺麗さっぱり消えれば良い」

「……陰湿だな。ってか、それって成立するのか？」

「無理だと思う。スピード・J・Aの呪いであの頭髮は護られているから」

「……そうか」

本当に、前に三日間金貨大に禿ろって念じたのに全く通じなかった。

「もう少し些細なことを積み重ねて精神的に追い詰めるとか？」

「些細なこと？」

「毎日の食事に嫌いなものしか出てこない、とか、出勤したら誰もいない、とか」

「それ、アラストルだけ……あ……そうだ。ウラーノ・ナルチーズの晩御飯、毎日人参になれば良い」

「人参？」

「うん」

「……お前、人参嫌いなのか？」

「別に。でも人型の、そのまま食卓に上がった時のウラーノ・ナルチーズを見てみたい」

「そうだ良い事思いついた。」

「ウラーノ・ナルチーズが女王陛下に会うときに両方の靴下の柄が違ったら良い。さらに靴も間違えて履いていたら良いのに」

「……陰湿だろ」

「もう少しでかいことしろとアラストルは言うけれど、どうでもいい。」

「ウラーノ・ナルチーズのナルチーズな性格を利用すればいいんだ。」

「帰る」

「お、おい……」

「アラストルを残してさっさとアジトに戻る。」

「また、あのうっとおしい金髪が居た。」

「やあ、玻璃」

「……ウラーノ・ナルチーズなんて、マスターにダーツボードの代わりにされればいいのに」

「そう、ウラーノ・ナルチーズに言えば一瞬固まる。」

「玻璃、それは私に死ねと言っているのかな？」

「死ねとか汚い言葉使っちゃダメってマスターいつも言ってる。どうせ言うなら「くたばれ」って言うから安心して」

「そっちの方が汚いと思うのだけどねえ」

呆れたようなウラーノ・ナルチーゾ。

それと同時に、マスターが戻ってきたようだから、慌てて部屋に戻る。

「ウラーノ・ナルチーゾなんて悪魔に攫われれば良いのに」

どうやって不幸をあげようか。

そう考えるだけ。

考えるだけのその時間が楽しい。

だって、結局あの化け物には私の呪詛は利かないもの。

私の呪詛が通じるのはアラストルみたいな人間が相手のときだけ。

今頃葡萄酒まみれになっているだろうアラストルを思い浮かべると、からかいに行きたくなって、こっそりとアジトを飛び出すことにした。

柔らかな皮膚を切り裂いて

ローザは呪われた地だと他国の者は口をそろえて言う。

何よりも、この地の主、プルトーネ・ローザは近隣の国民からは「悪魔の城主」と呼ばれている。

いや、クレツシエンテ国民でさえ、この領主、薔薇の伯爵を恐れている。

血も涙も無い悪魔と罵るものがいれば、血を啜る魔物だと恐れるものもいる。

しかし、当のローザ伯は大変な臆病者だということは全く知れ渡っていないかった。

「カロンテ」

「はい、プルトーネ様」

「なにやら悲鳴が聞こえるのだがあれは何だ？」

「ファントムからの侵入者を吸血薔薇が切り裂いているところです」

「なっ」

「ええ、それはもう、思いつきり、容赦なく。肌を切り裂き、内臓を抉り、血を吸収して今宵も深紅に染まっております」

「カロンテ、生々しい表現は止めてくれ」

ローザ伯は頭を抱える。

彼の不健康な白い肌はますます青ざめたし、深い青の瞳は憂いに揺れる。

「あの薔薇はなんとかならんのか」

「一応、特産品ですからねえ。あれがなくなるとローザの収入源が減ります。それに、警備の人間を雇う必要がなくなりますから、多少の悲鳴さえ我慢すれば問題はないかと」

「その悲鳴が問題だ」

ローザ伯はため息を吐く。

「夢に出てくる」

「夢くらい我慢してください。プルトーン様」

「嫌だ。貴様、我輩がどれだけ不気味な夢を見ているか知らぬからそんなことを言うのだ！」

「それは……プルトーン様の夢はプルトーン様だけに許された領域ですから私のようなものには理解できないかと」

カロンテは困ったようにそう言って、書類に目を落とす。

「プルトーン様、残念なお知らせです」

「何だ？」

「どうも、吸血薔薇を掻い潜って領土に侵入した愚かなファントム兵がいたようで、傭兵がそれを捕らえてしまったようです」

「なっ……ということは……」

「まあ、法の通りにしなくてははいけませんねえ」

「誰だ、あんな法を作った愚か者は」

「プルトーン・ローザ一世ですね。あなたのお父様です」

「……ああ、気が重い」

血を好むと言われるこの伯爵は何よりも争いを嫌った。

「だが、法は守らねば効力を失う」

「ええ、お辛いでしょうが……」

「捕らえた兵は串刺しに。それがローザの法だ。だが……何故我輩が現場に行かねばならんのだ……」

ローザ伯は深い溜息を吐いた。

「そつだ。暗殺者を雇おう」

「は？」

カロンテは思わず自分の主を見た。

「暗殺者なら殺しに慣れている。何も我輩の目の前で極力傷が目立たないように極力悲鳴を上げさせない方法で串刺しにだって出来るはずだ」

こいつは馬鹿だったかもしれない。カロントはそんなことを一瞬考えてしまった自分を叱咤する。

「プルトーネ様。我がローザ領にはそのような資金はございません」

「なっ……」

「傭兵を雇うのが精一杯です」

「なんとかならんか？」

「無理です」

ローザ伯はカロントを見た。

忠実な僕ではあるものの、少しばかり融通が利かないこの男は確かに優秀ではある。

が、それとこの精神の問題は別物だ。

「我輩の精神を安定させるためでもか？」

「法は法です」

「では法を変えよう」

「簡単に言わないで下さい」

「悪逆無道は一度きりで良い」

ローザ伯はそのまま黙り込む。

「ですが、プルトーネ様は国境を守らなくてはなりません」

「分かっている」

ローザは二つの国と隣接する。よって侵略者を抑えるのもまたローザの役割だった。

「生贄は何匹だ？」

「数は三十程です」

「……仕方が無い」

ローザ伯はようやく立ち上がる。

「行くぞ」

「はい」

怯えきった捕虜の元へ「悪魔の城主」とその従者が向かう。既に彼の震えは無い。

ブルトーン・ローザはクレッシェンターの演技力を持つて伯爵たる地位を維持していたのだった。

哀しいって、どんなものだった

「おかえりなさい」

ありえない声がした。

仕事を終え、家に戻ると何故かあの忌々しい女が飯の支度をしている。

「なんででめえが居る？」

リリムはどこだ。

何故この女がここに居る。
理解できん。

「リリムは温泉旅行に行ってもらったの」

「は？」

温泉旅行？

「たまには翹を伸ばさないといくら【壊れない】からって疲れるじゃない？」

目の前の女は笑う。

「私が一日家事を代わってあげるからいつてらっしゃいつて言ったら、ルシファー様には悪いけど、お言葉に甘えさせていたくださす」って可愛く笑っていたわ。そう、お土産も買ってきてくれるって」

目の前の女はくすくす笑いながら呑気に皿を並べている。

「何しに来た。朔夜」

「だから、リリムの代わりにルシファー様のお世話をしにきたの」
壊したい。

今すぐ目の前の女を壊したいが、これもまた壊せない女だ。

「女神の手下はとっとと帰れ」

女神の加護なんて厄介なものを持っている女。

「ダメよ。だって、リリムにお饅頭を買ってきてもらう約束をしてしまったもの。しっかり働かないと」

この女は間違いなく馬鹿だ。

「いらねえ、帰れ」

大体どうやってこの家に入ったんだ？

俺は魔力で弾き返せるが大抵の奴らは術に嵌って碎け散る罠を張っていたはずだ。

「信仰心は身を救うのよ？」

結局女神の加護か。

「それにしても、貴方、もっと大事にしないと本当にリリムに振られるわよ？」

「あ？」

こいつは何を言っている。

「リリムの体質で得するのは貴方だけね。全く。どうしてリリムはこんな人を選んだのかしら」

文句を言いながらも目の前の女は針仕事を始める。

「俺はお前に来てくれと頼んだ覚えは無い」

「リリムに頼まれたのよ。あの子、年中再生しっぱなしだから疲れているはずよ？ 貴方の癩癩が直撃してるんだもの」

「だからリリムは俺の嫁なんだよ」

うざってえ女。

壊したい。

「黒焦げにしたいくても出来ないから？」

「壊しても壊しても壊れない。大人しく従順。てめえとは違う」

自分の亭主だって人に誇れる性格はしてねえだろ。そう言っすりたいたがこれ以上小言を貰いたくもない。

今は一刻も早くこの女を敷地から追い出すことを考えるべきだ。

「リリムの記憶が消えるのは貴方のストレスのせいじゃないかしら？」

「うるせえ」

会いたくない顔。

うるさい小言。

お前は俺の母親かと言いたくなるほど口煩い女。

「あーあ、リリムが可哀想」

本当に、態とだろう。

俺を怒らせて遊びたいとしか思えない。

何でこんな女が女神の加護を受けているか理解できない。

リリムこそがその加護を受けるにふさわしい女だろうに、女神は何を考えているんだ。

「リリムは本当に可哀想な子。自分さえ理解できていないの」

「は？」

「嬉しいとか哀しいとか、そう言うことが理解できていないのよ。

あの子は」

リリムは良く笑う女だ。

笑うか泣くかしない。

そして目が覚めれば何があつたのかを全く覚えていない。

そう、覚えていられない。

「朔夜、てめえリリムに何をした？」

あいつが土産の約束なんか覚えていられるはずが無い。

「ふふっ、今日はセシリオのお世話を代わってもらったの。だって、うざかったもの」

本性を現しやがった。

「自分の亭主をそんな扱いしていいのか？」

「いいのよ」

さては夫婦喧嘩でもしたのだろう。

「……迷惑な女だ」

リリムはなぜ承諾したんだ？

そう思ったとき電話が鳴る。

「あら、意外と持ったわね」

「何？」

「出てあげないと、大変よ？」

目の前の女にいやな予感しかない。

『朔夜！ 何とかして下さい！ 部屋の中を刃物が飛んでいます！』

朔夜が居ると信じきったリリムの声。

あの女が叫ぶ声を初めて聴いた気もする。

「……世話の焼ける奴だ」

仕方ない。

連れ戻しに行くか。

「てめえはとつと家に帰れ」

「嫌よ。今日はセシリオの顔なんか見たくないもの」

「だったら大聖堂で籠城してろ」

この迷惑夫婦はいつか壊す。

それより今はリリムだ。

俺意外に壊されることが無いと言い切れない。

心配などしていない。

ただ、俺のものを他人に取られるのが気に入らない。
それだけだ。

よそで笑っているあいつを見たくない。
それだけだ。

もう何も言わないで

「どうして？ どうしてあの人は今日も城に戻らないの？」

ヴェーヌス様が癩癩を起こしている。

どう宥めたら良いのか分からない。

「ネイト！ 直ぐにムゲットからあの人を呼んで！」

「ムゲットからこのオルテインシアはとても距離があります。今向かっている最中ですよ。一刻も早くヴェーヌス様に会いたいと焦がれながら、会ったら何を話したら良いかと必死に考えている頃です」

いつからか分からない。

私の主は壊れてしまった。

「そうか。そうか。だが、そんなことなど考えなくてもよいのに。

私は一緒に居られるだけで幸せよ。ああ、愛しい人。早くその顔を見せて頂戴」

うつとりと妄想に浸るヴェーヌス様。

お勞しい。

何故こんなことになってしまったのだろう。

全てはあの男のせいだ。

あの男が宮廷騎士になどならなければ。

いや、王の目に留まらなければ。

いや違う。

あの日ヴェーヌス様がムゲットにさえ行かなければこんなことにならなかった。

「ネイト」

「はい」

「あの人のために美味しいお茶を用意して。それに美味しい食事も。いや、食事は私が用意するわ。ああ、早く！ 早く！」

「もう直ぐです。もうすぐ」

こんな嘘を吐くのも疲れた。

けれども、完全な嘘ではない。

あの男は来る。

このオルテインシアに。

来ないわけには行かない。

ヴェーヌス様はこのオルテインシアの伯爵なのだから。

王だつてヴェーヌス様に気を使い、協力を得る必要がある。

何より、このクレツシエンテに唯一の女性の伯爵だ。

王は重宝している。

少しくらいの我儘を見逃す程度に。

「ネイト、あの人を迎えに行かなきゃ」

「ヴェーヌス様がそこまでなさる必要はありません。お出迎えはこのネイトにお任せください。もしかするとあの方はヴェーヌス様にお会いするのが恥ずかしいのかもしれませんが。話題に困っているかもしれません。それでしたら話題を提供するのもこのネイトの仕事にございます」

「ネイト、そう言つていつもお前ばかりがあの人に会っているじゃないか。私も早くあの人に会いたい」

「ヴェーヌス様、たまにしか会えないからこそ愛おしさが募るので。彼は既にヴェーヌス様に夢中です。ただ、少しばかり恥ずかしがりやなのでヴェーヌス様に会えずに居るのです」

もう嫌だ。

そう思うのに私の口は嘘を吐く。

この人を傷つけない。

私のたった一人の主。

私の存在意義。

もう、いつそ何も言わずにこのままこの方と朽ちて行こうか。

「ネイト、あの人はまだ？」

「もうすぐです。ヴェーヌス様」

いつそ殺してしまおうか。

あの男を。

そうして首を持ち帰れば、ヴェーヌス様は満足してくださるだろうか。

私の大切な人。

たった一人のご主人様。

ヴェーヌス様。

愛しているからこそ、私は貴女に真実を告げられない。

愛しているからこそ、貴女を苦しめるあの男が許せない。

「ネイト、あの人はもう来たかしら？」

「もうすぐですよ。ヴェーヌス様。あの方がいらっしゃる前に、飛び切りのおめかしをしてお出迎えいたしましょうか」

可哀想なヴェーヌス様。

もう、何年も待ち続けている。

可哀想なヴェーヌス様。

私の見え透いた嘘にさえ騙される。

もう、何も言わないで。

もう、何も言わせないで。

誰か、時間を進めて。

願っても、また同じ一日を繰り返すだけだ。

息が止まるくらい

綺麗な人だと思った。

天使が居るならこんな風だろうと思っていた。

そう、息が止まりそうな程、見入った。

けれど、天使なんかじゃなかった。

悪魔。まさに悪魔と呼ばれるほど、悪逆無道の人だった。

「失敗？ そんなもの許されるとでも思っているんですか？」

冷たい目。

何の感情も籠らない目。あえて言うなら侮蔑かもしれない。そんな色を秘めた目で、あの人は任務に失敗した子供を見た。

その直ぐ後には一本のナイフが舞う。

そう、舞うという方が良くくらい美しい動きだった。

美しく舞ったナイフは確実に少年の命を奪った。

どきりとする。

次は私の番かもしれない。

「どうしました？ 朔夜」

あの人が私を見る。

「いえ、任務が終わったので報告を」

「もう、終わったのですか？ 予想よりも二日も早い。やはり貴女は優秀です。僕の期待通りだ。けれど、玻璃はもっと優秀でしたね。あれは期待以上だ」

嬉しそうに、眠っている玻璃を見て言う目の前の人はつい先程少年を殺した悪魔と同一人物には思えない。

悪魔じゃない。子供。

そう、子供。

玩具を手にした子供にしか見えない。

この人から見れば私達はただの玩具でしかないのかもしれない。

「優秀な貴女にはご褒美をあげましょう」

「え？」

「まあ、女の子ですからね。たまには良いでしょう？」

手を出すように手で指示される。

言われたままに出せば、手の上に何かを乗せられる。

「これは？」

「鏡です。身だしなみに気を使うんでしょう？ 女の子は」

面白そうに彼は言う。

「そう、なんですか？」

「違うんですか？」

つまらないと彼は言う。

理解できない。

私はこの悪魔を理解できない。

殺されるかもしれない。

私はいつだってこの悪魔の傍で命を落とす危機に晒されている。

「普通の感覚は私達にはありませんから」

「それも、そうでしたね。では、朔夜は普通になりなさい」

「はい？」

「普通の女の子、なんて良いんじゃないですか？ 仕事の時以外は」

難しい注文だ。

けれども、彼の気まぐれに付き合わなければ次は私が砂先程の少

年のように【破棄】される。

ただそれだけ。

この人には何の痛手も無い。

怖い。

足が震えそうだ。

けれども堪えなければいけない。

きつと怯えていることが知られば、私は用済みにされてしまう。

「可愛気の無い子ですね」

「すみません。そう言ったものを教えていただいたことがないので」

「そこが面白くありません」

不満そうに言われるけれど其処まで完璧に要望に応えることは出来ない。

「善処します」

「別に構いませんよ。朔夜は朔夜ですから」

退屈そうに彼は欠伸をして、それから辺りを見渡す。

「瑠璃が戻りませんね。あの不良娘は何をしているんだか。あんな簡単な任務に失敗するほど弱くも無いでしょうに」

彼は窓を見る。

日が昇る。

それまでに戻ってこなければ失敗ほど悪くないにせよ何らかの制裁を貰う。

「呼び戻しますか？」

「必要ありません。あれが大人しく言うことを利くようにも思えません」

そう言いながら玻璃の髪を撫でる。

綺麗。

この指のしなやかなこと。

多分この指に惹かれた。

だって、この人は良く見ればあの時みたいな輝きはない。

どうしてこの悪魔を天使と間違えたのか既に思い出せない。

「朔夜？」

不思議そうに見られる。

「すみません。懺悔をします」

でも、確かに天使だったかもしれない。

だって、この人は私に言い訳をくれた。

食べるものと着るものと寝る場所だけでも十分なのに、仕事と言
い訳をくれた。

「朔夜」

「はい」

「行くならついでに花を買って行ってください」

「え？」

「白い花を買って持って行ってください」

「はい」

悪魔は天使で、神だ。

この人は私の神。

言い訳をくれて、それに真実味を持たせてくれる。

「マスター」

「何です？」

「大好きです」

「は？」

悪魔が固まった。

貴重な瞬間。

呼吸さえ忘れるほど戸惑った悪魔は初めて見た。

「行ってきます」

「え？ あ、待ちなさい！」

引き止める声を聞こえない不利をする。

困った子供だと言われたような気もするけれど、それが嬉しいよ
うなくすぐりたい感触。

悪魔は天使で神でお父さんで上司で、時々友達。

そう思うと、それほど怖いものでもない気がした。

あのきらめきはきつと期待値だった。

私の期待が満たされたからあのきらめきが見えなくなったんだ。

悪魔と取引をした悪い子を女神様は保護してくれる。

不思議。

けれど、その言い訳をくれる悪魔と女神に救われていることは間違いない。

空に舞い上がる炎

退屈だ。

誰もいないこの城で、一人で過ごすのは酷く退屈だ。

ユリウスが仕事を持ってくるのが恋しくなる程度には退屈で、カトラスでも追いかけてムゲットに行こうかと思えるほどには退屈だ。つまり私は退屈だ。

あれがアザレーアに弟子入りしてからというものの、殆どロートには顔を出さなくなった。

寂しい。

私はこんなにも愛を注いでいるというのに、あの幾分歳の離れた弟には全く伝わらない。

哀しきことだ。

そういえばカトラスは最近異国の少女をいたく気に入っているようだった。

なんと言ったか？

ああ、薫だ。

あの娘は中々良い。

愛嬌がある。

苛めなくなるのも分からなくも無いが、どちらかというと世話を焼きたくなる娘だ。

そういえば、空に咲く花がどうか前に言っていたような気がする。

あの娘は玻璃の、そう、私の愛しき玻璃の友人でもある。

悪い人間ではない。私の愛しき玻璃の友人なのだから。

そうだ、あの娘をもてなそう。玻璃も一緒に。

二人とも喜ぶはずだ。

そうだ、魔術で空に花を咲かせよう。

料理は何を喜ぶだろうか。

カトラスの好物を並べればあの娘を喜ぶだろうか？

そうだ、もしかするとあの娘は未来の私の義妹になるのかもしれない。

いや、そうだ。そうに違いない。

そうとなれば一層もてなさなければならぬ。

確実に喜ぶもてなしを考えなくてはならない。

どうするべきだ？

ああ、そうだ。直接カトラスに訊こう。カトラスならあの娘の好みを知っているはずだ。

電話。

使ったことは無いがおそらくは繋がるだろう。

カトラスの派動を感じ取れば繋がる筈だ。

ん？

でない。

壊れているのか？

仕方が無い。私が直接出向くしかなさそう。

鏡よ！ カトラスの部屋に繋げ！

「で？ 何をしに来たのですか？」

不機嫌そうなカトラスも愛らしく見える。

随分と久しぶりに見る顔だ。

「あの娘は居ないのか？」

「あの娘？」

「薫とか言う娘だ」

おかしい。

普段は檻に閉じ込められた小動物のようにずっとこの屋敷に居るあの娘が居ない。

「居ません」

「何？」

「もう居ませんよ。あの子は。もう戻りません」

まるで玩具を失った子供だ。

「取られたのか？ 壊したのか？」

壊れたのなら直せないが取られたのなら取り戻そう。

そう思ったがカトラスは笑い出す。

「師匠ですよ」

「ん？」

「師匠があの子を連れて行っただんです。もう、僕の元には戻りません。そういう契約です」

狂ったとは思えない。

壊れてしまった。

昔から正常ではなかったが脆い弟が壊れた。

そうとは思えない。

「師匠があの子を連れて行きました」

「そうか」

では私のもてなしの計画は崩れ去ったのだ。

「帰ってください」

「ああ」

長居出来ない。

直視したくない。

直視しなければならぬが、今はその時ではない。

幸い、この弟は死ぬことが無い。

だが、それは本当に幸いか？

このままさらに壊れる様子が目に浮かぶ。

カトラス。

私の弟。

名を捨てた頃から狂い始めた。

そのうち賭け事に溺れた。

そして、いつしか心を失くした。

けれども、あの娘が……。

「薫……」

カトラスを壊したのはお前か？

いや違う。

あの子は元々壊れていたのだ。

そう、思うしかない。

触れられるものは棘しかなく

それは革命だった。

玻璃と二人飢えて凍えていた私達の頭を優しく撫でて、「大丈夫？」と言ったのは朔夜だった。

朔夜はスリが上手かった。

大人から金や食い物を取って私達に分けてくれた。

大人は汚いものを見る目で私達を見たけれど、朔夜だけは違った。いや、今思うと朔夜もその汚いものに含まれていたただだ。

二度目の革命はマスターだ。

突然捕まえられて何事かと思ったら、「丁度いいですね」と謎の言葉と共に私達三人をいきなり今のアジトに押し込んで、それから丁度今私が使っている部屋に押し込んで鍵を掛けた。

いや、今もその部屋を使わされている私はやっぱり部屋に戻りたくなる。

けれどマスターはあの変な目で私達を見なかった。

そりゃあいきなり水を掛けられたい「汚いから脱ぎなさい」と服を奪われたりと良く分からないというか今なら切りかかっているような理不尽なことも沢山されたけれどとりあえず食べ物と寝床は提供してくれた。

まあ、その後に殺しても気が済まないほどんでもないことは沢山されたが。

「瑠璃ちゃん」

「んー？」

「セシリオが呼んでいるわ」

「へいへい」

もう直ぐか。

次席が決まる。

まあ誰になるかは予想できるが。

マスターの、伝説の暗殺者の右腕が決まる。
ずっと空席だったあの席が埋まる。

「誰が選ばれるのかしら？」

「私じゃないことだけは確かだよ」

「え？　僕は瑠璃様だと思います！　だって一番足が速いのは瑠璃様です」

アンバーは理解してはいなくせにそう言う。

まあ、悪気も策略も何も無いただの馬鹿だから仕方がない。

「お馬鹿さん、瑠璃様ではない。瑠璃様こそがこの組織の頂点に立つにふさわしいに決まっているだろう」

「お前も馬鹿だよ。頂点に立つことはマスターの地位を奪うつてことだろ」

ジャスパーは完全な玻璃信者。

崇拜してる。

こいつが今幹部に居る方が私は不思議だ。

「ってか玻璃は？」

「遊びに行っちゃったわ。こんな大事な日なのに」

「まああいつは話し合いとか寝てるからな。居てもいなくても事後報告だけで満足するだろ。ってかマスターがそもそも召集する気が無い」

「まあね」

でも、マスターの右腕は玻璃だろう。

あいつはマスターに次ぐ実力だ。

補佐になるならあいつしか居ない。

けれど。

三度目の革命は鋭く刺さった。

「は？ 朔夜？」

「ええ、まあ、当然です。人を纏めることに慣れていきますからね。朔夜は。何より僕の妻です。当然でしょう？」

マスターはあっさりと言った。

信じていた者を砕かれた。

「何故玻璃様ではないのですか！」
ジャスパールが吼える。

「玻璃は、組織に縛られない方が伸びます。あの子は何れ死神の名を手にする」

マスターは窓の外を見る。

「おや、噂をすれば、ですね」

「ただいま」

「お帰りなさい」

「朔夜おめでとう」

玻璃はまるで最初から知っていたかのように朔夜を見る。

「玻璃、お前はそれでいいのか？」

「うん。だって今までと何も変わらないもの」

玻璃は満足そうに言う。

初めてだった。

玻璃と私の意見がずれた。

まるで片割れに突き放されたような気分だ。

「ジャスパー、お絵かきしよう」
「はい。玻璃様のお心のままに」

ジャスパーは玻璃の信者で従順で馬鹿。

アンバーは人懐っこく単純な馬鹿。

系統こそ違えど似たような部下を持つて、同じような鍛錬と仕事量だったはずなのにいつの間にか玻璃との距離が広がっている。

何故だ？

玻璃は私の片割れなのに。

痛い。

何かに刺されたみたい。

けれどもそれは見えない。

ただ、目の前に、いつもと変わらない賑やかな光景が広がっているだけだ。

爛れた皮膚

燃えろ、燃えろ。全部燃えろ。
焼き尽くせ。何もかも。

大きな炎は怖い。
だけど、火は綺麗だ。
全て焼き尽くせば、きつと何も残らない。

醜い私は残らない。

「兄さん……」

私、綺麗になったでしょ？

真っ赤なの。

あかあかと燃える赤毛。

真っ赤な瞳。

兄さん好みの綺麗な赤。

綺麗でしょ？

兄さんの愛したあの女はあっけなく死んでしまった。

亡骸は家に保管されてたっけ。

でも兄さんももう興味を示さなくなったし、私の魔力を注ぐ必要も無くなった。

燃えてしまえ。

全部。

服も髪も皮膚も内臓も何もかも。
この家と一緒に。

「兄さんは私の兄さんだもの。あんたなんかに渡さない」

兄さんについてこんな田舎に来てしまったけど、私にこんな田舎は似合わない。

田舎臭い女は燃えている。

焼けて美味しそうな香ばしい匂いをさせている。

ただ、頭髮だけが異臭を発する。

この匂いは嫌い。

ねえ、兄さん。

私もムゲットに行くわ。

とびつきり派手に着飾って、誰もが私を見ずにはいられないように。

それでね、兄さん。

私は国中に名を轟かすの。

兄さんみたいに。

真っ赤に染まった死神に、きっと私もなって見せるわ。

兄さん。

ほら、赤いドレスが似合っでしゅう？

ねえ、私。

綺麗でしょ？

今、そっちに行くわ。

だから、ちゃんと見つけてね？

夜の闇の中でも。

この手に委ねられた、君の命

油断しすぎだ。

俺の主は俺の目の前で眠っている。

きつとこの方は喉元にナイフがあっても起きない。

俺がこの人を殺さないことをこの人は良く知っている。

それだけじゃない。

生まれ持った呪詛が守っている。

恐ろしい方だ。

「玻璃様、食事の時間です」

一応声は掛けるけれど、眠ったまま。

いや、食事の世話をさせてくださるということは完全に俺を信頼してくださっている証だ。

もし、俺が毒を盛ればいくら玻璃様とは言え命を落とすこともあるだろう。

もつと悪くすれば死ねずにひたすら苦しむことになる。

それでも玻璃様は俺に全てを任せてくださっている。

肉料理を作ったときはいやそうな顔で俺の方に皿を押し付けることもあるけれど。

「玻璃様、本日のドルチェはティラミスですよ」

その言葉に僅かに耳を動かすいつまでも幼い主。

可愛い。

思わず撫でたい衝動に駆られるが、僕の身分でそんなことは許されまい。

「玻璃様、起きられないのでしたらドルチェは瑠璃様の胃袋に納まりますよ」

「ダメ！」

飛び起きた。

子供だ。

本当に。

「ドルチェは姉にも譲れないと？」

「むうっ、だってジャスパーのドルチェは何食べても美味しいの」
完全に信頼した上での言葉。

もし、俺が毒を盛ったらこの人はどうするのだろうか？

気付かずにそのまま食べてしまうだろうか？

それとも、気付いて尚、知らぬ不利をして食べるだろうか？

そう、結局この人は食べるだろう。

全てを受け入れてしまう。

「ジャスパー、ココアが欲しい」

「はい」

絶対的な信頼。

俺の不安なんて気にしない。

この人はそう言う人だ。

俺はこの方の命を預かっている。

この方の生きる源を管理している。

だからこそ。

俺は自信を持って言える。

この方をお守するのはこの俺、「ジャスパー」だと。

ほんの僅かなものも掬い上げる事が出来ずに

「お兄ちゃん、ナサニエルがね、月には女神様が住んでるって言うの。私も女神様に会えるかな？」

「ああ、会えるさ。ちゃんと元気になつて外を走り回れるようになれば月にだつて行ける」

幼い妹の頭を撫でてそう言ってやれば嬉しそうに騒ぐ。

もう何十年も幼いまま。

病気のまま。

俺はこいつを救うことが出来ない。

「えー、お兄ちゃんは嘘なんて吐かないよ。ナサニエルとは違うの！」

妹の左手に住み着いた変な人形。

いや、人形は昔から遊んでいた人形劇の妙なトカゲだ。

けれどもそいつがいつからか【ナサニエル】になつて妹とだけ会話する。

俺にはナサニエルの声が聞こえないが、どうやらナサニエルは常に俺の悪口を言っているらしい。

「サングレ、ナサニエルは月には行けない」

「どうして？」

「人の悪口を言う奴を女神様が嫌うからだ」

女神なんているはずが無い。

けれどもこいつがそれを信じることで助かるなら女神だつて俺は利用する。

「ナサニエルは悪い子だからいけないの？」

「ああ。だから、お前は元気ない子になるんだ」

そう言つと幼いままの妹は「うん」と声だけは元気よく言つ。

実際元気なのかもしれない。

いくつかの臓器は他人のものと取り替えたし、薬は何だって最新
のものを投与している。

これ以上無いほど俺は妹には甘い。

今まで稼いだ金の大半をこいつにつぎ込んで、今まで得た知識の
全てを使って治療に専念している。

だが、どんな手段を使っても戻らない。

呪い。

そんなものは認めたくない。

だが、現に妹は永遠の子供となりつつある。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「あのね、サングレお姉ちゃんが欲しい」

「ああ、今度買ってやる。って……お姉ちゃん？」
いくらなんでも無理だろ。

いや、そこらへんの女を買ってくることは可能だが、こいつの姉
になれるかは……。

「おいおい、兄ちゃんじゃ不満か？」

「ううん。でもお姉ちゃんも欲しい」

金でどうこうなる問題じゃねえ……。

「どんな姉ちゃんが欲しいんだ？」

「うーんつとね、サングレと沢山遊んでくれるお姉ちゃんが欲しい
！」

家庭教師は追い返す、メイドは三日で入れ替わるサングレと遊べ
る女なんて居るのか？

「まあ、とりあえず探してみる。それまで待つてろ」

「うん」

こいつから見れば、「お姉ちゃん」も新しい玩具なのだろうか？
それとも、既に俺が人間さえ商品としか見れなくなっているのだ
ろうか？

「兄ちゃんに買えないものはねえ。楽しみに待ってるよ」
幼い妹の頭を撫でてやる。
俺に買えないのはあの悪魔の呪いを解く術だけだ。

塞がらない傷口

カアーネの部屋に行くのは久しぶりだ。

あの子の部屋は何時だつて綺麗に片付いていて、生活感が薄い。

無駄なものは殆ど無い。

最低限必要な家具と、最低限必要な食器、裁縫箱、それに本当に必要なだけの普段着と制服しかない。

ただ、最近はそのに編み物の道具が加わる。

「カアーネ、居るか？」

「はい」

「悪い、タイツを編み直して貰えるか？」

「また、か？」

捨てるよとカアーネに言われるが経費削減のためだ。

陛下の「着せ替え遊び」のおかげで国庫は痛手を負っている。

「このタイツは柄が繊細でな。陛下のお気に入りのなんとかという職人が一年掛けて編んだものらしい。まあ、カアーネなら直せると思つて持ってきたわけだが」

「……この程度で一年も掛けた？ その職人直ぐに辞めさせるべきだ」

カアーネが不快そうな顔をする。

やはりこの子は優秀だ。

「さすが、裁縫試験で受かっただけのことはあるね」

「……ラファエラ、思ったのだがあの採用基準は変わらんのか？」

あの最終試験のせいで優秀な志望者を失っている気がするかとカアーネは言う。

「ユリウスに言え。尤も、私とユリウスが壊滅的に家事能力が無いがためにあの試験が出来たのだが……そのおかげでお前のような優秀な部下を持つことができた。うん。素晴らしい試験だ」

「ラファエラ……ラミエルが残れたことに驚いてくれ」

「掃除がうまい。それこそ死体まで綺麗にする。血の一滴も残さない。ということは宮廷内を汚さない。陛下に快適に過ごして頂く為に必要な人材だ」

「ポーチェは？」

「あれは情報処理能力は極めて高いが、自分のスカートの長さを理解していないだけだ。それに、陛下のお茶の時間には欠かせない」

「まあ、それは認めるが……奴が壊した大理石の数と比べてどうかと思うぞ？」

カアーネはタイツを見ながら言う。

「珍しいな。お前がそんなことを言うなんて」

「そうか？ 夜までには仕上げれそうだな。一度帰るか？」

「いや、お前の腕を見せてもらおう。それで？ 何か思うこともあったか？」

道具を取り出しタイツの修繕を始めたカアーネを見れば、溜息を吐かれる。

「一緒に受験した男が中々良い筋をしていた。勿体無いと思ってな。奴は言っていたぞ。試験内容が裁縫でなく料理なら私に勝てたとな。今じゃ奴もこの国に名を轟かせる優れた護衛だ」

カアーネは心底残念そうに言う。

「あんなにも優秀な男を他に取られるなど……惜しいと思ってな」

「あの年は本当に訓練服が足りなくなるほど痛んでいてな、直ぐに修繕できる人材が欲しかった」

「……国庫が傾いていたのは昔からだ？」

「カアーネが来てから少し盛り返した」

本当に優秀だったのは裁縫の腕ではない。

予算案の立て直しは素晴らしかった。

「ユリウスだってお前のことをかなり気に入っている」

「ユリウスが？」

「はつきり意見を言える部下は重宝する」

試験課題は立て直すか。

この子が其処まで気にしていたとは思わなかった。

「相変わらず生活感の薄い部屋だ」

「休日以外は殆ど監獄で過ごすからな。監獄の部屋も寝るだけだ」

「あそこで寝られるお前の精神力に驚くよ」

憎き詐欺師にも洗脳されずに耐えたこの子は素晴らしい人材だった。

発狂しても尚、陛下の為に舞い戻ったのだから。

「皮肉なものだな」

「ん？」

「いや、あの馬鹿が私に新しい才能を見つけさせた」

「ああ」

本当に、編み物の才能を開花させたのは間違いなくあの男だろう。一体私が見なかったあの数日にカアーネに何をしてくれたのだろう？

「カアーネ、訊いても良いか？」

「何だ？」

「あの詐欺師に何をされた？」

「……」

カアーネは黙り込み、そして頭を抱える。

「すまん。何も覚えていない」

「……そうか」

言いたくないのかとも思ったが、そうではない。

この子は馬鹿正直だ。

嘘なんか吐けない。吐いても直ぐに分かってしまうような可愛い嘘だ。

おそらくは、本当に何も覚えていないのだろう。

「カアーネ」

「ん？」

「お前、可愛いな」

「は？」

「陛下の着替え遊びを交代しないか？」

「は？」

カーネは呆れたように私を見る。

「もううんざりしてきた」

陛下の為なら耐えるが、それでも私も人形役は飽きてきた。

「たまには戦闘に行きたいのだが、陛下の下さった衣装を駄目にするようないことがあってはなあ、だから代われ」

「それは陛下の意思に反するのでは？」

カーネはもう、なにも聞かなかったという態度で、魔法のようにタイツを復元させていく。

「器用だな」

「このために選ばれたのだろうか？」

そう、手先の器用さだけでこの子は選ばれた。

忠誠心などは後からどうにでもなるが才能だけは話が別だ。

「我々は才能だけで選ばれる。個人の思想や性格は無視だ」

「そういえば、ラファエラは何故選ばれたんだ？」

「私は陛下から直接お声を頂いた」

「え？」

「髪の色が気に入ったから来いと」

「嘘だろ？」

「ああ、嘘だ」

言える筈が無かるう。

私達の試験内容が「人形劇」だったなど。

「言っておくが、私はユリウスと全く同じ試験内容で受かっている」

「ユリウスから聞けと？」

「奴も言わないだろうがな」

幼い陛下を満足させる。それが目的だった。

「宮廷騎士に一番求められることは戦闘能力の高さでも知識量でも無い。いかに陛下に快適に過ごしてただけか、いかに陛下にお

喜び頂けるかだ」

「それを判断するのは？」

「その時の宮廷騎士団長とその補佐だな」

「なら結局私を選んだのはユリウスとラファエラか」

「大当たりだった」

笑って見せれば溜息を吐かれる。

「直った」

「早いな。本当に魔法みたいだ」

「これくらい出来なければ宮廷騎士には入れないのだろうか？」

「まあな」

職人芸よりさらに上を求められてもいないのにやってのけるのがこのカアーネだ。

「カアーネ」

「何だ？」

「次の議会で昇給できるように進言しておこう」

「いや、必要ない。すでに使い切れないほど貰っている」

本当に可愛い奴。

欲が無い。

出世欲があるのかと警戒したがそんなことも無かった。

「お前、本当に可愛いな」

「はいはい、用事が済んだら帰れ」

「つれない」

「昇給は要らんから次は茶菓子でも持ってきてくれ。殆ど戻らない部屋だから茶菓子は置いていないんだ」

「ああ、そうしよう」

思わず笑った。

生真面目な部下は真面目くさった顔のまま言っただ。

ミカエラ・カアーネという女はどこにいても異質で、どこにいても溶け込む。

そんな不思議な女だ。

カーネの部屋をユリウスは「犬小屋」と呼ぶけれど、私はこの犬小屋が心地よいのかもしれない。

片付いている部屋は多いけれど、カーネの部屋はその中でも少し異質で、異質だからこそ、私を呼ぶ。そんな気がする。

熱を失うからだ

「先生、これはどうしたら良いのですか？」

懐かしい夢だ。

「先生？」

先生、先生と不安げに僕を見上げるあの子。
リリムだ。

何年前だっただろうか。

あの子は良く懐いていた。

「先生、不老不死はありえるのですか？」

「さあ？ 僕も確かめたことはありません。ただ、僕がかつて師とした人は不老長寿でしたね。七百年以上少女の姿のまま、永遠の時を生きていると聞きました」

そう言う僕も既に四百年の時を生きている。

「不死ではない？」

「殺そうとしても死にませんが、死んでしまったら不死ではない。こちらの実力が足りないのか、本当に不死なのかの見分けはつきませんね」

「まあ、ではあの赤い死神にも確かめられないのですか？」

「……彼は試そうともしません。自分の得にならない仕事はしない主義ですから」

あの子は良き弟子だった。

あの子は優秀な術士になった。
けれども。

あの子は壊れてしまった。

「先生、約束していたお茶を持ってきました」

毎朝、この家に来る。

先生、お茶と同じ茶葉を持ってくる。

「ありがとうございます。淹れて頂けますか？」

「はい」

嬉しそうに返事をする馬鹿な娘。

壊したのはあの男だ。

とても優秀に仕上がったのに、一瞬で壊してしまった。

「先生、私、結婚しました」

「おや？ 誰とですか？」

「ルシファー様です」

「聞いたことがありますね。どのような人ですか？」

毎日同じ会話を繰り返す。

「とても、素敵な人です。炎のように熱く燃える人です」

うつとりと、毎日同じことを言う。

僕がここに居ない日は、この子はどうしているのだろうか？

「美味しいですね。どこのものですか？」

「ファントムから取り寄せています」

嬉しそうに笑う。

いつもと何も変わらない。

会話を变えればそれなりに違う返答はするが、次の朝にはまた「

先生、約束していたお茶を持ってきました」から始まる。

毎日同じ茶葉。

毎日持つてこられるので溜まる一方だ。

決して減らない。増える一方。

なのにこの子は毎日持つてくる。

毎日買って毎日持ってくるのだ。

緋の悪魔は何も言わないのだろうか？

「新しい生活には慣れましたか？」

「はい、皆さんとても良くして下さいます」

毎日同じ会話。

けれどもこれも嫌いではない。

面白い。

この子がこの先どうなるのか。

数日留守にしてみても、戻った時にはまた同じ一日が始まる。

もし、この家を売ってしまえばこの子はどうするのだろうか？

この家に戻らない間もこの子は同じ日を繰り返しているのだろうか？

「先生？ 聞いていますか？」

「すみません」

「暦がおかしいのです」

「暦？」

「はい。五年も先の暦になります」

ああ、もう五年経った。

この子の報告で気がつく。

「リリム、自分がおかしいとは思わないのですか？」

「どうしてです？ だって、他は何も変わらないのに。あ、でも、

あの子が居なくなりました」

「あの子？」

「空の髪の人懐っこい男の子が居なくなりました。昨日は居たのに今日は居ません」

「今日は休日なのかもしれませんね」

「ああ、そうですね。ルシファー様はお優しいもの。ちゃんとお休みもあるんですね」

リリムはるふふと笑う。

るふるふといつもおかしいな笑い方をするこの娘を僕は嫌っては居

ない。

けれども、救ってあげようと思うほど、親切でもない。
愚かな娘。

肉体を手放してしまったことに気付かずに、永遠を生きる娘。
決して壊せないという理由であの男に気に入られてしまった。

「リリム」

「はい」

「僕はこれから少し出かけますが、貴女はどうしますか？」

「ご同行させていただいても？」

「構いませんよ。今日は薬の材料を買いに行くだけです」

調合は好きではないが実験は暇つぶしに丁度良い。

そう、この子の観察もまた、良い暇つぶしになる。

あなたの言葉は私を傷つけるものでしかない

「期待してるわ」

「よく頑張ったわね」

「さすが私の子」

小さいときから常に監視されているような気分だった。

あの人は私をとて愛していたのだと思う。

ただ、愛し方に問題があった。

常に「期待」「期待」「期待」

子供に過度な期待をしてはいけなないと、誰も教えてはくれなかったのだらう。

私だって教わったわけじゃない。

ただ、経験として知っているのだ。

「まあ、流石ね」

驚いたように魔女が私を見る。

「才能はあるわ。もう、弟子は取らないつもりだったけれど、貴女のことは教育したくなかったわ」

貴女が望むならだけど魔女は言う。

「おのね、ずっと魔女になりたかったんだ」
思い切って言うてみた。

「魔女に？」

「そう、魔女に。ずっとずっとなりたかった」

魔女になるために沢山勉強も修行もしたし、両親を満足させるだけの成績も維持した。

「残念だけど、貴女は魔女にはなれないわ」

魔女は微笑んだま言う。

「どうして？」

「貴女は王になるからよ」

魔女はくすりと笑う。

「貴女は望まれてきたの。この国に。そしてそれが必然」

ああ、この人もかと思う。

小さいときから常に監視していたのはこの人だった。

この人は私を見定めていたのだろう。

そして私はその期待を満たしてしまった。

常に「期待」「期待」「期待」

勝手に過度な期待をして、勝手に失望していく。

私が望んだわけではない。

ただ、世界がそうだったのだ。

私はずっと期待されている。

そして勝手に失望される。

期待と失望は常に私の周りにあり、決して消えない。

必然という都合の良い言葉に隠されて。

壊れたところ

私には理解できない。

陛下の為に全てを捧げるなどということ。

「アルジズ騎士団長、どういふおつもりですか？」

「もう、私は騎士団長ではありません。貴方が騎士団長です。ユリウス」

もう、腕章も渡した。

書類上の手続きも済んだ。

「一体何故？」

「もう、疲れてしまったのです。姫のお相手に」

幼い姫は本当に我々を振り回してくれた。

いや、もう彼女は女王だ。

姫ではない。

「私はあの方が本当にお小さい時からこちらで仕えて参りましたが、そろそろただの民に戻りたくまりました」

「何故？」

「ここは煌びやか過ぎる。私には手の届かない場所だった。それだけです」

この掃き溜めは本当に煌びやかで、陰謀が渦巻いている。

ここを訪れる貴族やら商人やら魔術師は皆小さな女王を利用しようとするものばかり。

そして、彼女もまた、その争いに巻き込まれ散っていった。

「私はもう、陛下の為に散る覚悟を持てなくなりました」

「貴方ほどの人が？」

「私はただの人間です。貴方ほど優秀な戦闘能力があるわけでもありません。それに、貴方のように可愛らしいしぐさで陛下を喜ばせることも出来ません」

そう言うところ、ユリウスは微かに頬を染め、不機嫌そうな顔になる。

「あ、あれは……言わないで下さい」

「知ってるよ。それだけ貴方も必死だったのでしょう？」

可愛らしい人形劇の二人の部下を忘れるはずも無い。

二人とも必死で、真剣なのがなおさら可愛い。

だから彼女も私もこの二人を選んだのだ。

「ラファエラは元気ですか？」

「彼女はいつでもいいでしょう？」

「良くないよ。彼女もまた、騎士団を支えていくのだから」

私の相棒は散ってしまっただけで、彼女はそうはならないだろう。

「ラファエラなら……また陛下のお着替えです」

「ああ、陛下にも困ったものだ。国庫は既に危ういというのに。もう、私ではどうもならない。儉約せよと言っても騎士団だけではどうしようもならないだろうに」

「貴方が出来ないことは私にもできません」

ユリウスは本当に私を慕ってくれている。

嬉しくもあり、苦しくもある。

「出来るじゃないか。現に私は剣を使えない」

「ですが、重火器はアルジズ騎士団長の得意とする戦法です。それに、戦闘なら我々が援護します」

「いや、ユリウス。次は貴方がこの騎士団を纏めなさい。私はね、もう疲れてしまったのだよ」

私を支えてくれた彼女はもう居ないのだから。

「何故？」

「君は本当に頑固だ。困った子だ。仕方ないね。本当のことを言う」

この子にはどんなに嘘を塗り固めても無駄だ。

「ユリウス、実はね。私には娘が居るんだよ」

「娘？」

「ああ、娘だ。まだ幼い娘を一人にしたくない。あの子は母親を失くしてしまったからね。私が傍に居たいんだ」

そばに居たいのは私だ。

彼女に良く似たあの子をひと時だって離したくない。

「だったら宮廷に置けば良い」

「いけないよ。ユリウス。騎士団員は常に陛下を最優先しなくては
いけない。だからこそ、私はここを出る。あの子と過ごすために」
当分は働かなくても良いほどに、いや、一生働かずに使用人を雇
って生活できるほどの貯えはある。

「それに、私は君が作る未来を見たい」

口から出任せの嘘でさえ、この子は信じてしまっ

私は裏切るのだ。

この子を。陛下を。

そして新たな主に仕える。

「この国を作るのは君達だ。陛下と共に」

「アルジズ様……」

もう、彼は騎士団長と呼ばなくなった。

自覚を持つてくれたのだろうか。

「たまにお会いすることは出来ますか？」

「ええ、いつでもどうぞ。君なら大歓迎ですよ」

けれど、きっと次にこの子に会うのは、私が捕らえられる時だろ
う。

私はどこかで期待している。

この子が私を捕らえてくれることを。

私を罰してくれることを。

私が求めているのは救いではなく、罰だった。

あなたは窓の外ばかりみている

「ユリウス、この書類に目を通しておいてくれ」

「誰がユリウスだって？ 僕のことはジルと呼べといつも言っているはずだが？」

不機嫌そうな部屋の主、我らが宮廷騎士団長ユリウスこと自称ジールは私を睨みつけ、それから書類を奪い取り視線を落とす。

「またカーネか」

「予算が足りないそうだ。確かにこここのところリヴォルタが活発に動いている。その分囚人も増える」

「それで？」

「今の倍は欲しいところだが、財源確保が困難だ。それに……非常に言いづらいのだが……」

「何？」

ユリウスは不快そうに私を睨む。

「……その、だな……陛下のお召し物がどんどん増えて行く。それで、衣裳部屋が溢れ返っているのだが、近頃陛下が召抱えた仕立て屋を大層お気に召されているようでだな……こちらも予算が足りんのだ」

「……陛下が……けど、これ以上どこも削れない。かといって増税となると暴動が置きそうだ。欲の皮ばかりの張った連中だからね」

「……研究部の予算は削れないのか？」

「ああ、あそこか。まあ、近頃成果が出ていないからね。少しくらいは削れるだろうけど、あまり削りすぎても苦情が来るし、何より少し削ったくらいじゃ追いつかない。医療部は削るわけにはいかなから、困ったものだ。陛下に我慢をさせていただくような事になれば僕は君と一緒に首を切らなきゃいけない。それだけは避けたいね」

君と一緒になんて死んでもお断りだよとユリウスは言う。

「……後は団員の給与を減らす程度か。ジル、お前今いくら貰ってる？」

「は？」

「食費も家賃も掛からないんだ。ぎりぎりまで削っても問題なからう。どうせたいした趣味も無いのだろう？」

「そういう君はどうなんだい？ 君こそ衣食住費が掛かっていないだろう。王宮に住んで陛下と同じものを口にして衣服も陛下自らお選びになっている。たいした趣味も無い」

「……いや、衣服は結構掛けている。休日くらいは楽な服を着たいからな。素材と形にはかなり拘っている」

「へえ、けど、それって削れるよね」

容赦ない。

流石だ。

「まあ、三割までなら」

「五割削ろう」

「……そりゃあそれなりに蓄えはあるが……そういう貴様はどうなんだユリウス」

「僕は武器の手入れにかなり掛けているからね。でも、まあ三割くらいなら削れるかな」

「貴様こそ六割は削れ」

「ついでにカーネも削ろう。あれの趣味はレース編みだったか？ 作品でも売れば少しは収入になるだろう」

「……鬼だな」

「仕方ないよ。幹部の給与でも削らないとやっていけないんだから。ポーチエの減給だけじゃ足りない」とユリウスは言う。

「カーネが騎士団内のどこかに嫁にでも行けばそれなりに削りようがあるのだが……」

「いや、あれは高給取りだからあれの嫁か婿の方が仕事をやめると思っ」

「確かに。ユリウス、貴様が辞めろ」

「は？」

「どこかに嫁に行け」

「僕はこの仕事を辞めるつもりはないよ。そういう君が嫁に行けばいい。まあ、貰い手がいればの話だけど」

「いちいち腹が立つ言い方だ。」

「ユリウスを見れば先ほどから何度も窓の方を確認している。」

「そういう貴様は相手はいるのか？」

「僕は生涯陛下に仕える」

「私だってそのつもりだ。陛下こそが私の全て。陛下の為ならば地の果てまでお供する」

「君って、結構な変態だよな」

「貴様には言われたくない」

「ユリウスは書類から顔を上げ、窓の外を見る。」

「どうした？」

「私の問いには答えない。」

「いつまで其処にいるんだ？ 入っておいでよ」

「いつに無く優しい声でユリウスは窓の外に向かって言う。」

「……こんにちは」

「こんにちは。ちゃんと挨拶できてる。いい子だ」

「心なしかユリウスの表情が柔らかい。」

「窓から入ってきた少女はどこか見覚えがある。」

「ああ、カアーネの妹か」

「違うよ」

「違うのか？ カアーネがよく面倒を見ているだろ」

「僕の客人だよ。玻璃、今日は何の用だい？」

「晴れているから遊ぼう」

「遊んで欲しかったらちゃんと正門から入って、戸から訪ねてくるんだ」

「だって、門には番犬がいるもの。番犬は嫌い。いつも吼えている」

はりと呼ばれた少女は本当に嫌そうに言う。カーネは随分と嫌われているようだ。

「遊ば」

「僕は忙しい」

「だって、マスターは出かけているし、瑠璃は任務だし、朔夜はお祈りに行ってしまったから誰も遊んでくれないの。ジャスパールとアンバーも出かけてしまったわ。とても退屈。それに一人は嫌」

「ラファエラ、ココアでも淹れてあげて」

「は？」

経費を削減しろと言う割りに、この男はしっかりと自分は呑みもしないココアを部屋に常備している。

「…紅茶とコーヒーの種類を減らせ。そしてココアは置くな。来客用と言いながら一人しか飲まないだろう」

「玻璃はコーヒーを飲めないからね。甘いものを用意しないというるさいんだ」

「持参させる。経費削減だ」

全く。

この男は妙なところで子供に甘い。

「ジル」

「ん？」

「こないだね、カトラスAに会ったよ」

玻璃の言葉にユリウスは立ち上がる。

「どこで？」

「んーっとね、魔女の家の屋根でお昼寝してたら家が揺れて落ちそうになったの、その時にね、下で魔女とカトラスAが言い合ってた。ううん、カトラスAが一方的に怒ってたの」

「魔女の家？」

「うん。蘭の家。家？　お店？　うん。大聖堂前の噴水の中央の通りにあるお店」

「いつ？」

「こないだ」

この玻璃と言う少女はあまり頭はよくないのだろうか。

こないだとか、お店だとか正確とは言えない表現を使う。かとい
つて嘘を吐いている様子でもない。

「ラファエラ、茶菓子を持ってきて」

「は？」

「情報料。甘いものをよこせてことだろう？ 玻璃」

「ううん。遊びたい。チェスしよう。ジルは強いから好き」

悪戯っ子の表情で玻璃は笑う。

軽く眩暈に襲われたが、情報料が決まったらしいので、今日は今
う仕事の話も出来そうに無い。

私は大人しく直ぐ隣にある自分の部屋でゆっくりと休むことにし
よう。

軋む身体

年齢を感じない身体とはいえ、老いはあるのだろうか。
どうも最近、身体が鈍っている気がする。

「朔夜」

「はい」

「ちょっと鍛錬に付き合ってください」

「嫌です」

養女に頼めば全力で嫌な顔をされ断られる。
むすめ

「何故です？」

「まだ死にたくありません」

「おや、珍しく弱気な発言ですね。僕が貴女を殺すと？」

「マスター、最近腕が鈍ったのでは？ とシルバが言っていましたよ」

朔夜はそう言って本を閉じて立ち上がる。

手は微かに鞭に伸びているのでいつナイフが飛んでも良い様にと
いう覚悟だろう。

「シルバがねえ。あれに言われるのは少しばかりムカつきますね。」

シルバにしましょう。今日の相手は」

僕の腕が鈍った？

シルバにだけは言われたくありません。

「マスター、そこどいてください」

「ん？」

慌てた様子でシルバが走ってくる。

「家の中で走り回らないで下さい」

「直ぐ避けて！ 玻璃！ それは反則だ！」

シルバは何かから逃げている。

それを目視して、咄嗟に左に避けた。

朔夜は何事も無かったかのように本を開き始めるが、朔夜以外そんなことはできない。

「玻璃ちゃん、亡者は仕舞って猫は元の場所に戻してきなさい」

冷静すぎる姉に玻璃は少ばかり不満そうだ。

「猫、飼っちゃ駄目？」

「駄目よ。シルバ、貴方も一緒に猫を戻してきて頂戴」

武器を構える気さえ起きないらしい。

部屋中をなにやら黒いもやが覆って猫たちが怯えたように鳴いている。

「玻璃ちゃん、瘴気も駄目よ」

「はい」

不満そうに返事をした玻璃が猫を何匹か抱きかかえる。

「シルバ、これは？」

「すみません。玻璃と遊ぶ約束をしていたのですが、五分ほど遅刻したせいで、玻璃が大量の猫を集めていまして……それに向かって亡者をけしかけて遊んでいました」

そしてシルバも巻き込まれたと。

「あれはどこから来るんですかねえ？」

亡者。

腕や頭しかない黒い塊。

触れると呪詛に【感染】するらしい。

あれが通った後はしばらく草木が育たないとか、不幸を撒き散らすとかとにかく色々言われているが、真相は分からない。

「あの呪詛、なんとかありませんか？」

「さあ？ 僕は暗殺者であって魔術師ではないので。まあ、今度スペードにでも聞いてみますか。気が向けば」

瑠璃は言霊使いだとか魔女が言っていた気もするが、僕には関係

の無いことだ。

「マスター、玻璃ちゃんに相手をしてもらったら？」

「名案です。玻璃、手合わせしませんか？」

「うん」

嬉しそうな声で返事をする。

「じゃあ、俺は朔夜ちゃんに肩でも揉んで貰おうかな？ いやあ、歳かな。肩こりが酷くてね」

「貴方が歳なら僕は何ですか？」

「マスターは化け物でしょう？」

「貴方に言われると何故か腹が立ちます」

本当に。

そもそも何故朔夜を指名するのか理解できない。

「で？ 朔夜ちゃんのお返事は？」

任務以外は極めておどけて過ごすのがシルバだが、腹が立つ。

朔夜や玻璃が僕以外に懐くのも気に入らない。

「構いませんよ。座ってくださいな」

朔夜は本を閉じてシルバを見る。

「何読んでたの？」

「聖典です」

「飽きないねえ」

朔夜がシルバの肩に触れる。

今すぐ殺してやりたい衝動に駆られる。

「マスター、遊ばないの？」

玻璃に上着を引っ張られた。

「ええ、今行きます。武器はどうします？」

「ナイフ」

「本数は？」

「うーんとね、えーっと、いち、に、さん、ご、なな、はち、じゅう！」

「……数えられていませんね。指と同じ数で良いですか？」

「うん」

全く、何度教えても玻璃は数字を覚えない。

「マスター、気をつけてくださいよ。玻璃は随分強くなりましたから」

「僕が負けるとでも？」

「マスター腕が鈍ってきたでしょう？　そろそろ危ういかもしれませんよ」

シルバはからかうように言う。

結局こいつは玻璃が可愛くて仕方が無い。

僕と同じ親の立場のつもりなのだろう。

気に入らない。

「何度教えても玻璃は4、6、9を抜かして数えます。意図的なものだと思いますか？」

「多分。まあ、玻璃が何を考えているかなんて玻璃にしか分かりませんよ」

シルバは心地よさそうに朔夜に続きを催促しながら答える。

「マスター、玻璃ちゃん、鍛錬なら外でやって頂戴。この前も食器棚を全滅させたでしょう？」

「ははっ、朔夜は母親みたいだね」

「シルバ、どういう意味かしら？」

「いや、そう見えただけだよ」

朔夜が珍しくシルバを睨んでいる。

まだ子供だと主張したいのだろう。

甘えん坊で困る。

大人扱いを嫌うおかしな子だ。

「朔夜に怒られます。外に出ましようか」

「はい」

素直な返事を聞いて、玻璃を庭に出す。

朔夜を見ればまだ少しばかり不機嫌そうだ。

「朔夜」

「はい」

「夕食の材料を買いに行ってもらえますか」

「はい。何を買ってきますか？」

「そうですね、芋と林檎と、あとは任せます」

「……献立が予測できません」

「朔夜に任せます」

「困ります」

「困ってください」

どうも、朔夜を見ると苛めなくなるようだ。

いや、シルバにばかり構っている朔夜を見ると、と言う方が正しいかもしれない。

「マスター、まだ？」

「今行きますよ」

張り切っている玻璃の方へ足だけ向ける。

「ああ、朔夜」

「はい？」

「シルバの夕食は要りません。今夜から長期任務に行ってもらいます」

「え？ 聞いてませんよ」

「今決めましたから」

「……勘弁して下さい。玻璃と全力で遊んだ後に任務って、俺に死ねと？」

「構いませんよ？」

そう言っただけならシルバは慌てる。

面白い。

「玻璃、今度一緒にシルバの首を取る遊びをしませんか？」

「それ、楽しい？」

「ええ、きつと」

玻璃は遊びたいだけ。

僕は苛めたいだけ。

老いたせいか少しばかり陰湿になったような気もする。

「玻璃は、シルバが好きですか？」

「うん」

ナイフをぶつけ合いながら、普通の会話。

いや、嫉妬しているのかもしれない。

火花が散る。

「でも」

「ん？」

「マスターも好き」

好き、という言葉と同時にナイフが飛ぶ。

「……玻璃、言葉と行動が一致していません」

殺気が籠っていた。

「大好きだから、本気」

玻璃の周りに呪詛が集まる。

玻璃に愛されるものはきっと不幸になるだろう。

その不幸に耐えて尚、玻璃を愛せるものでないと玻璃を嫁には行かせられない。

なんて随分気の早い話だ。

「では、シルバには本気ではない？」

「本気。でも、本気になると怒られる」

「それはシルバの実力不足です」

ナイフが玻璃の頬を掠める。はずだったが、綺麗に弾き飛ばされた。

「強くなりましたね」

「本当？」

嬉しそうな顔。

「ええ、本当です」

答えた瞬間、腕に衝撃。

玻璃のナイフを受けたはずが腕が痺れる。

「本当に、強くなりました」

もう片方の手でナイフを飛ばせば綺麗に弾かれた。
負けるかもしれない。

この娘に。

確かに腕は鈍っているらしい。

「でも、まだまだです」

加減する余裕は無いが、敗北は無い。

玻璃の喉にナイフを突きつける。

「僕の勝ちです」

「うん」

実戦なら死んでいる状態。

なのに玻璃は嬉しそうだ。

「玻璃？」

「やっぱりマスター凄い」

心からの敬意を感じる。

玻璃もこういうことを考えるのかと少しだけ驚いた。

「玻璃は今、誰が一番好きですか？」

意地悪な質問を試みる。

けれど、どう答えるかが気になる。

「んーっとね、朔夜と瑠璃とシルバとマスターと、えっとね、えっ

とね」

答えが出ない。

「一番を聞きました」

「分らない。みんな好き」

みんな好き、ということとは、今挙げた中の誰か一人を殺せと言え
ば殺せないということだろうか？

まあ、幸い今回は全員身内だ。

けれども、もし、この子がで敵を愛してしまえば、どうなるうだ
ろう。

溜息が出る。

「マスター？」

「いえ、僕も歳を取ったのは事実のようです。何時までも若いつもりではられませんね。ああ、肩が凝った」

わざとらしく言えば「薬草貼る？」と心配そうに見上げるものだから可愛い。

どうやら僕は身内には甘いらしい。

どうしたものか。

こんなにも多くの弱点を作ってしまうなんて。

歳は取りたくないものだ。

君の純粹さ、それは何よりも

この子は鬼子とされていたのだろうか。

鬼子、その表現は遠い海の向こう。この子の生まれ故郷の表現だ。

一心不乱に標的を切り刻む姿はまさに悪魔。

鬼はその同義語と聞く。

この子は悪魔。つまり鬼なのだろう。

「玻璃、もうそのくらいで良いよ」

「うん」

返り血を浴びた私の妹分。

血に染まるその姿は恐ろしくも美しい。

私はこの子に畏れを感じる。

「マスター、褒めてくれるかな？」

「ああ、きつと。玻璃は優秀だからね。俺も負けてられないな」

初仕事の時から思ったが、この子がいると俺の出番なんて殆ど無い。

たまに援護が必要があるくらいで、標的までの案内と脱出の指示。それ以外の主に殺しに関する部分はこのの方が優秀なくらいだ。

「あれ？ ナイフ新しくなった？」

「うん。この前の報酬でね、マスターと一緒に選びに行ったの。前
のより投げやすいの」

投げやすいナイフで突き刺して殺すとは、この子の戦闘能力が恐
ろしい。

投げナイフの殺傷能力は低いはずなのにもかかわらず、この子は
的確に急所を突く。

教えたわけではない。

本能で嗅ぎ取っている。

「玻璃は凄いな。もうマスターに武器を選んでもらえるのか」

「え？」

「下っ端のペーパーはとりあえず兄貴分に武器を選んでもらって、それから自分で使いやすいのを探していくんだよ。マスターに選んでもらえるってことはすごい期待されてるって証だ」

玻璃の頭を撫でてやれば気持ちよさそうに目を細める。

「本当？ マスターの役に立てる？」

「ああ、もう、すごく役に立ってるよ」

この子はマスターが拾ってきた子供。

期待されている。

生き残っている。

それ故に、盲信している。

この子にとってあの赤い死神こそが全てなんだ。

「ハデスの下っ端見つけたら殺せてマスター言ってたけど、何人殺せば喜んでくれるかな？」

無邪気に笑いながら玻璃が言う。

「そうだね、二、三人で十分じゃないかな？」

あまりむやみに殺させては情報を入手できなくなる。

下っ端は口が軽い。

重要な情報は持っていないけど、微かな情報でも欲しいのは事実だ。

「それより、今日は朔夜がタルト作るって張り切ってたよ。急いで帰らないと全部瑠璃の胃袋に納まる」

「ダメ！ 早く帰らないと」

「じゃあ、競争だ」

無邪気な子供。

必死になって走ろうとする姿は滑稽だけでも愛らしい。

純粹で、純粹だからこそ恐ろしい子供。

この子は鬼子だ。

悪魔の子だ。

呪われた子だ。

きつとこの子は世界を支配する。

マスターのように。

恐ろしい。

けれども誇らしい。

私が育てたこの子は、やがて恐怖の代名詞となる。
それが何よりも誇らしいと思うのだ。

希望と絶望の境目

異界へ旅するということは誰もが一度は夢を見、誰もが一度は怯えることだろう。

「……ほんと、見た目だけなら日本人なのに」

目の前の黒髪の少女は真っ赤な瞳でただ見つめてくる。
時々何かを歌うけれどもそれが何を言いたいのか全く分からない。
この少女からは感情を読めない。ただ、規則的な音階。旋律。

「君、どこから来たの？」

訊ねても返事はない。

ただ、不思議そうに首を傾げられる。

「ここはどこなんだ？」

訊ねても訊ねても返事無く、いや、返事をしてくれてはいるの
だろう。

歌が聞こえ、そうして首を傾げられる。

人に会えた時は少しだけ安心した。

歳の近い少女。外見も日本人っぽい。

そして何より俺に武器を構えなかった。

けれども、少女の口から零れたのは日本語ではなく、知らない言葉の知らない歌。

そう、この世界の人間は歌を言葉にしている。

「音楽って人を元気にするものだってあの音楽教師は言ってたけどなあ……」

あれは絶対嘘だ。

音楽は俺に絶望しか与えてくれなかった。

それはゆるやかに終わりに向かうような

「んで？」

目の前の男は気が抜けたような顔で聞き返す。

「シエスタ第23代王子、ロホ様は無事なのか？」

「まったく、お前は愛国心が強すぎる。とっとと国に帰ったらどうだ？」

「金があればさっさとそうしてる」

「ほう」

そう、何時だった私は祖国に帰ることを夢見ている。

ただ、金が無い。

この国で私が生きるためにはこの国の国民の三倍の税を納めなくてはいけないし、組合に払う金もある。保険のようなものなのだが、万が一の時に守ってもらうための金だ。

そして、国の家族に仕送りがいる。

「メデイシナ。アタシを買わないか？ 満足させてあげる」

「生憎間に合っている。ってか、お前、あいつはどうしたんだ？」

「あいつ？」

「得意客の、なんつつったか？ タロツキのスートみたいな名前の奴だよ」

「ああ、あの男だね。もう、あいつの相手は嫌なんだよ」

「へえ、珍しいな。お前が客の不満を言うなんてよ」

からかうように言いながら、メデイシナは書類に目を落とす。

「アンタ、こんな良い女を前にして仕事かい？」

「悪いな。生きてる女にはそれほど興味が無いんだ。俺が興味を持

つのは外じゃねえ、内^{ナカ}だ」

気持ち悪い男。

きつと変態っていうのはこういう奴を言うんだ。

「嫌になるねえ、仕事男つてのは」

「だったらなんでわざわざ俺の職場に来る？」

「アンタくらいしか話す相手がいないからさ。同郷のよしみってやつだよ」

「迷惑な話だぜ」

わざとらしく溜息を吐く男に腹が立つが知らぬ不利をする。

「アンタしか居ないんだよ。王子の話が出来るのは」

「まあな」

「祖国が傾いている時にアンタは呑気だね」

「まあ、俺は帰る予定は無いからな」

「この国に永住するの？」

「病院もあるし、店もあるからな。こっちの方が商売しやすい。規制が少ないからな。まあ、いちいち宮廷に申請するのが少し面倒だが、それさえ通れば後は楽なモンだ」

呑気な男。

祖国が消えるかもしれないのに。

「口水様が行方不明だそうだ」

「ああ」

鏡味ガなさそうな返事。

「アンタ、愛国心つてのは無いのかい？」

「俺にとっちゃ既にこっちが祖国みたいなもんだ」

「税を三倍取られても？」

「悪いな。俺は宮廷主治医だ。つまり、女王陛下の専属だ。税は免除なんだ」

「げっ」

ぼろぼろだな。

「アンタ儲けすぎだよ」

「まあな。けど、金で買えないものがあるって事が分かった」

「へえ」

アタシからすれば金で買えないものなんて分からないけどねえ。

「金さえあれば幸せになれるだろうに」

「金があつても治らねえ病気もあるんだ」

「へえ、けど、アンタなら治せるんだろ？ だったら金があれば幸せだろ」

「俺でも治せない」

「え？」

驚いた。

クレツシエンテーの名医が匙を投げる病とはどんなものだろう。

「金があつても治らないモンは治らない。せいぜいその健康な身体を大事にしとけ」

「なんだよ。それ」

「お前の取り得はその健康な身体だろ？」

「まあね」

けれど私は老いていく。

いつかこの身体を失う。

それまでにせめて金だけは集めたい。

「やっぱり金が全てだよ」

「考え方は人それぞれだ。だがな、その考えは少しばかり寂しいぞ。昔の俺みたいだ」

メデイシナは溜息を吐く。

「アンタが？」

「ああ」

同郷だと考えも似るのだろうか？

「シエスタは貧しい。この国と比べて。昔と比べれば少しばかりマシになったが、未だに俺らは差別を受ける立場だ」

「けれど、この国は終る」

「おい」

「王が狂いだした」

「言つな。死にたいのか？」

「事実だ。客もみんな言っている」

もう、この国にも居られなくなるかも知れない。

「私は行くところが無いんだよ」

「しかたねえだろ。どうしようもない」

突き放つ言葉から、何故か優しさを感じる。

「メディシナ」

「国が滅んだら、その時はもう一度ここに来い」

「え？」

「ラウレルで雇ってやらないこともない」

昔からそうだ。

この男は。

頼りになる。兄のようで、父のようだ。

「ああ、そうするよ」

怖かった。

話を聞いて欲しかった。

この男は聞き流しているようでしっかり聞いてくれている。
不安を拭い去ってくれる。

私がここに来るのは、きっと安心したいからだった。

刻まれた痛み

罪人を奴に受け渡す時、ほんの一瞬とは言え緊張する。
私は奴を畏れているのかもしれない。

「ウリエル」

「ああ」

「あとは貴様に任せるのだったな」

「ああ、任せろ。皮剥ぎだったな」

「ああ」

妙な男だ。処刑が決まれば生き生きとする。

この男は殺しと拷問を何よりも好む。

気味が悪い。

「罪状は何だったろうか？」

「……おい、それを忘れて刑を決めたのではなからうな？」

「刑など全員死刑だ。方法は私のその日の気分で決まる」

「陛下のご意思は？」

其処が最優先だろうが。

「陛下は常に「首を刎ねよ」の一言だ。痛めつけた後に首を刎ねれば陛下はそれで満足なさる。私も満足だ」

これ以上良いことは無いといわんばかりの態度に溜息が出る。

「まあいい。貴様には期待していない」

「ああ、私に人間的な何かを期待するのは間違っている。同期のあなたが良く知っているだろうよ」

ウリエルは浅黒い腕に刻まれた刺青を見る。

罪人の証。

罪人であるこの男は罪人を裁く。

おかしい話だ。

「そう言えば、私はその刺青の意味を知らん。どういう意味がある

んだ？」

「これか？」

おかしそうにウリエルは翼のようなその紋を見せる。

「これは、陛下の暗殺を企てた者に刻まれる。暗殺を企て、失敗し、陛下に情けを掛けられた証だ」

「は？」

まさか。

ありえん。

陛下のお傍には常にラファエラが居るのだから。

「私は陛下がお小さい頃、まだ、先王の時代に陛下の暗殺を企てた」
「まさか」

「いや、事実だ。だが、殺せなかった。あの方の目を見たら、失くした妹を思い出した」

そういえば、幾分前に妹の墓参りがどうこうと言っていたのを思い出す。

尤も、この男がそんなことを気にしているということに驚いただけであまり感想は持たなかったが。

「これはな、私の忠誠の証だ」

「刺青が？」

「ああ、陛下を裏切れない。陛下を裏切れば私は死ぬ。そう言う呪いだよ。刺青と共に身体に刻まれる」

だからこそ理不尽なことにも従わなければならないとウリエルは言う。

「私は陛下と共に朽ちる。だから陛下を護る。罪人どもを見せしめにし、罪を犯すものを減らすのもそのためだ」

いや、残虐な処刑は貴様の趣味だろう。

そう言いたいのが、自分に酔っている状態のこの男にそんなことを言っても無駄なのは分かっている。

「今となつては陛下は私の全てだ」

「それは騎士団全体に言えることだ。陛下の為に尽くすのが我々、

「そうであるう？」

「まあな」

いつからかは既に思い出せない。

ただ、最早我々の全ては陛下のためだけに奉げられる。

「ああ、そうだ。カーネ」

「何だ？」

「陛下が帽子を所望だ」

「職人に作らせるのだろうか？」

「いや、前にラファエラが被っていたお前の手製の物と色違いが欲しいと先程おっしゃっていたぞ」

「……色違い……陛下はラファエラをご自分の姉か母のようにお思いなのか？」

「さあな。ただ、あの上に付いた丸い飾りを随分気にしていらっしゃった。あの飾りが欲しいのではないか？」

どうやら嫌がらせのつもりで作ったアレを陛下はお気に召されたらしい。

困ったものだ。

「貴様が作ればよからう。貴様が」

どうせ同じ試験で通っている。

やって出来ないことは無からうに。

「生憎編み物は不得手だ。私はどちらかというと刺繍の方が得意だな」

「そうか」

そういえば前に地図という大作を作って会議室に飾っていたか。気の長い男だ。

「どうせ暇なのだろう？」

「貴様と違って私は忙しい。罪人どもを見張っていなければいけない」

「そうか、私は暇だ。もう少し位話し相手になってくれ」

「……部下はどうした、部下は」

「奴らは仕事の時以外私と口を利きたくないらしい」

「私だって嫌だ」

そう、この男とはあまり会話をしたくない。

「私の仕事は少ないからな」

「ならこつちを手伝え」

「まあ、それも悪くは無い」

ウリエルは呑気に言う。

掴めない。

やはり私はこのウリエル・アスピデという男を畏れているらしい。

これ以上何も見せないで

好奇心旺盛とはよく言われるけれど、僕にだって見たくないものくらいある。

今の現状がまさにそうだ。

「だからいつも言っているだろう。お前は昔から全体統制が下手すぎる。これではアルジズ前騎士団長に笑われるぞ」

「いや、今回の失態は君が僕に付いて来られなかったが原因だ」

「お前のあの無茶な突入に私は初めから反対していた！」

「騎士団長は僕だ！」

上司の言い争い。

尊敬する二人がまるで子供のように言い合っている姿はこれ以上見たくない。

「「ラミエル！ 直ぐに片づけを開始しろ！」」

だけどそれは許されないらしい。

二人同時に全く同じ指示をされる。

けれどもあの二人はそれすら気に入らないようで再び言い争いを開始する。

仲が悪い。

理想は同じ癖にどこか考え方に相違があるのだろうか？

いや、違う。

お互い素直じゃないだけだ。

本当に困った人たちだ。

特に近頃のジル様はおかしい。

ラファエラ様の前だと常に意地を張り続けている感じがする。

「ラフィ、ラフィ！ お茶の時間だ。何をしておる？」

陛下だ。

珍しい。こんなところまで来るなんて。
急がないと。

陛下にあの惨状を見られてはいけない。

血の一滴だって陛下の目には入れてはいけない。

陛下は常に美しいものだけを目にしていなければいけない。

そう言うお方だ。

「申し訳ございません、陛下。直ぐに参ります」

「ああ、そうしてくれ。ラフィ」

「陛下、その呼び方は止めていただけませんか？」

「気に入らぬか？ ではラファ―？ レイフが良いか？」

楽しそうな陛下。

困惑したようなラファエラ様。

「良いじゃないか、レイフ」

「ユリウス……後で殺す。百回殺す」

「誰がユリウスだって？ 僕のことはジルと呼べいつも言っているはずだ」

「ふふつ、仲が良いな。ユリウスとラファエラは。我は嬉しいぞ」

「は、はあ」

ラファエラ様は困惑した様子だ。

「レイフ、後で僕の部屋に来なよ」

「その呼び方はよせ」

「まあ良いじゃないか。可愛いぞ、レイフ」

「陛下……」

僕の上司はおかしな人ばかりだ。

犬小屋に住んでいる人はいるし、愛称でしか呼ばれたくない人はいるし、愛称で呼ばれるのが嫌いな人もいるし、何より自分の服を踏んで転ぶ人もいる。

困った人ばかりだ。

まあ、僕も困った人に含まれるんだけど。

ああ、血がとれない。

困った。

またラファエラ様が派手にやってくれた。

彼女の鞭はじわじわと痛めつける武器だから、負傷した敵がいろんなところに血を落としていく。

証拠隠滅が大変だ。

「レイフ、今日のおやつは何だろうな？」

「さあ、ポーチェの気分で決まるのでしょうか？」

「ああ。ユリウス、お前も一緒にどうだ？」

「申し訳ございません。まだ仕事がありますので」

「つまらないな。少しくらい休んでもよかるうに」

陛下が歩き出してしまふ。

ラファエラ様を連れて後宮にお戻りになるのだろう。

「ラミエル」

「は、はい」

急に声を掛けられて驚く。

「残党は居るかい？」

「五人ほど居ると思います」

「そうか。王宮から追い出してから始末したいけれど、そこまで上手くはいかないか。ラミエル、掃除は任せたよ」

「え？ あ、はいっ」

急に生き生きとするジル様。

残党狩りだ。

ああ、また仕事が増える。

けれど、ジル様は僕に任せてくださる。

それだけ信頼されていると思って良いのだろう。

それが嬉しい。

殺戮の現場は見たくない。

言い争う現場は見たくない。

けれど、生き生きとした、ジル様を見たい。

仕事の出来る、陛下から信頼された上司達を見たい。

だから、僕も陛下に信頼される家臣になれるように今できる仕事を精一杯頑張ろう。

今はまだ掃除しか出来ないけれど、きっと陛下のお役に立てるように。

残党達の悲鳴が聞こえる。

陛下の笑い声が聞こえる。

阿鼻叫喚と、楽しいお茶の時間。

同じ敷地内で随分差がある。

けれど、どちらの声も互いには聞こえないのだろう。

そう思うと、少しばかり羨ましく思えた。

秘密の色

「ラファエラ・ガット、僕と結婚してくれないか？」

「その名で呼ぶな！」

思わず叫んで、それから目の前の男が妙な事を言ったことに気がついた。

「お、おい……ユリウス、今、何て言った？」

「僕の事はジルと呼べといつも言っているはずだけど？ まあいい。今日は見逃してあげるよ。ラファエラ・ガット、僕と結婚してくれないか？」

「は？ 気でも狂ったか？」

ありえない。

どこかに頭を強打したに違いない。

それともカトラスAに術でも掛けられたか？ とにかくありえない。

「いや、正気だよ。言い方が悪かったかもしれない。率直に言おう。助けてくれ」

「は？」

何が言いたいのかさっぱり理解できない。

「ヴェーヌス・オルティンシアを黙らせる方法を探しているんだ」

「あ、ああ……成程」

納得した。

誰でもいいから妻を持って言い訳を作りたいのだ。この男は。

「で？ 何故私に言う？ カアーネに言え、カアーネに。あの子はいいぞ。私が嫁に欲しいくらいだ。手先は器用、何気に料理も旨い。言いたいことはつきり言う。最高だ」

「カアーネは口煩くてダメだ。それに」

ユリウスは一瞬目を逸らす。

どうせろくでもないことを考えているに違いない。

「それに、君の方が可愛い」

「は？」

幻聴だ。

そうに違いない。

頼むから誰がそう言ってくれ。

「君はとても可愛い。ラファエラ・ガット」

「だーかーらーっ！ その名前で呼ぶな！ 気色悪い！」

名前を呼ばれるのも不快だが、何よりこいつの頭が心配だ。
どうしたというのだ。ユリウスよ。

「前から思っていたんだ。君は中々魅力的な女性だと」

「お前、頭大丈夫か？」

「残念ながら正常だよ。ラファエラ」

それは本当に残念だ。

「それで？ 君の答えは」

「ふ・ざ・け・る・な」

とりあえずこいつをラウレルに連れて行こう。

それがいい。

「君に拒否権なんてあると思ってるの？ 君、僕の部下なんだよ？」

「……ちよつと待て、それを職権乱用と言わないか？」

「地位なんて乱用するためにあるに決まってるじゃないか」

涼しい顔で言いやる。

「お前……最低だな」

「いい響きだよ。とりあえず逃げないように捕獲しておこうか。頷くまで僕の部屋でじっくりあの女の恐ろしさを語ってあげるよ」

「いらん！」

求婚しておいて他の女の話をするとかありえないだろ。

それ以前に私は男の相手なんて嫌だ。

「私はカアーネのような理想的な嫁を貰うとだな」

「構わないよ。君が僕の妻になるという事実さえあれば君が他に何人夫を持つが嫁を貰おうが僕は構わない」

「……それもどうかと思うが？」

つまり粹を埋めたいだけだろう。

「あー、あれだ。陛下の許可が必要だろう？ 私もお前も一応騎士団の最高幹部だからな」

ユリウスに至っては騎士団長だ。新米や下部とは話が違う。

「それならもう取ったよ」

「は？」

「祝福してくださるそうだ」

「陛下……そんな……私は地の果てまで、冥府の果てまで陛下にお供すると誓ったのに……」

「別に僕の妻になったからと言って君の仕事内容が変わったりはしない」

「そう、なのか？」

「ああ、むしろ君が陛下の護衛に居ない方が問題だ」
そうか。

私の仕事は今まで通り。

それなら悪くないかもしれない。

そう思った瞬間、手首に冷たい感触。

「……ユリウス……貴様……殺すぞ？」

「君には僕を殺せないさ」

余裕の笑み。

腹が立つ。だが、徐々に壁際に追い詰められているのも事実だ。

「それで？ 頷かないなら、このままあの女の恐怖を語ってあげるけど？」

「いらん！」

オルテーンシア伯がいかれているのは昔からだ。気にならん。
「そこまで嫌かい？」

途端に憂いを含んだ目で見つめられる。

「陛下の納得するものを仕上げさせるためには職人を監視せねばならんからな」

「ふうん。それは他の奴にやらせるよ。今日くらいは二人で過ごす」

「は？」

ダメだ。

誰だ。ユリウスをここまで壊した奴は。

オルテインシア伯か？ 詐欺師か？

「決まったのだから直ぐにでも入籍してしまおう。窓の外にあの女の気配がする気がするけど、気のせいだ。気のせい。そうだ。そう言ってくれラファエラ」

必死だ。

怖いくらい必死だ。

私まで窓の外を見るのが怖くなったじゃないか。

窓の外を見てみれば、微かにワイン色の光が見えるほかはいつもと変わらない。

きっと妖精でも飛んでいるのだ。

そう思っておこう。

「ああ、気のせいだ。外には何も居ない。居たとしても妖精だ。気にするな」

「妖精？ 王宮にそんなものが入れるはずが無いだろう？」

そうだ。

王宮に魔力を持つ人外の生物は入れないはずだ。

だったらあれは何だ？

「まさか……」

「考えるな。僕は何も聞かなかった。君は何も見なかった。それより、祝言はどうする？ 君の好きなようにさせてあげるよ」

「……いや、いらん。それより早く陛下の帽子をだな」

「白いドレスも良いけど、深い藍も似合いそうだ。折角だから盛大にやろう。それこそ王都の外へ、国中に知れ渡るほど盛大に。ああ、

ローザ伯に見立ててもらおうかい？ 彼は中々趣味が良い
ダメだ、必死に現実逃避している。

「ユリウス、私は……お前に任せる。好きなように計画を立ててくれ」

諦めるしかなさそうだ。

「明日は休みだろう？」

「あ、ああ……カアーネの部屋に行く予定だった」

「折角だから二人で出かけない？ 美味しい店を見つけたんだ」

「そ、そうか……」

怖い。

これはユリウスではない別人に違いない。

背後から殺気を感じる。

何か居る。

けれどもユリウスは気付かない不利を続ける。

「まさかとは思うがあれがオルテインシア伯か？」

小声で訊ねる。

「ああ……ラファエラ、なんとか出来ない？」

「無理だ。私には彼女に攻撃する権限は無い。陛下に危害が加わらない限り」

「王宮不法侵入罪で何とかならないかな？」

「後宮でなければ適応外だろ？」

「……逃げよう」

「は？」

「いや、むしろ、君の部屋に泊めてくれないか？」

いや、何を言っているんだこの男は。

「あの女、寝込みを襲いに来る」

ありえない。

なんて行動的な人だ。

「……カアーネの部屋に避難させてもらう」

「一人だけずるいじゃないか」

「元はと言えばお前の責任だ」

「僕と君は運命共同体だろう？」

手錠の鎖を見せられる。

物理的な意味かよ。

「ユリウス……」

腹が立つ。

何か驚かせることは出来ないか。

そう思ったら、身体が勝手に動いてユリウスの襟を掴んでいた。

「これからよろしく、ダーリン」

頬にキスしてやる。

案の定固まった。

意外と免疫の無い男だ。

いや、強まった殺気を感じたのだろうか。

「何時まで固まってるんだ。逃げるぞ。後宮に入ればこっちのものだ」

陛下のお昼寝の邪魔をするわけにはいかないが、衣裳部屋に逃げ込むことは可能のはずだ。

「ラファエラ、君……僕のこと、好きなの？」

「は？ 寝言は寝て言え。って、今寝るなよ？ お前が奴に捕まれ

ば私は間違いないで殺される。そんな気がする」

傍から見れば滑稽だ。

手錠で繋がれた男女が必死になって一人の女から逃げ回っているなんて。

けれども私達は必死だ。

命が掛かっている。

「ラファエラ」

「何だ？」

「指輪、渡し忘れてた」

「は？」

「本当は最初に渡すつもりだったんだ」

そう言つて、ユリウスは鎖で繋がれている私の手を掴んで、指を撫でる。

流れる動作で薬指に指輪がはめられる。

「……なんでサイズ知つてんだよ」

「陛下の着せ替え遊びのお蔭だよ」

ああ。納得。

そういえば陛下に着せ替えされるときに指輪も色々試された。

「お前、オルテーンシア伯とお似合いだよ」

嫌だ」

「行動が似ているぞ」

からかうように言えば溜息を吐かれる。

まったく、溜息を吐きたいのはこっちだよ。

迷惑な男だ。

その上酷く格好悪い。

カアーネに声を掛けなかったのはこれが原因か。

「懐かしいな」

「何が？」

「昔もアルジズ騎士団長に隠れて何かやるときは必ず私のところに来ただろう」

「……ああ」

「二人だけの秘密、随分増えたな」

「ああ。だから、君にしか見せない」

「は？」

「僕が弱味を見せるのは君だけだ」

まるで恋愛劇を観る気分だ。

この男の口からそんな言葉が出るなんて。

「恐ろしい人だ」

「え？」

「オルテーンシア伯だよ」

後数歩で、後宮だ。

安全が保障されている。

いや、保障されているのは戦闘開始権限か。

「ラミエル！」

ユリウスが赤毛の役立たずを見つけて叫ぶ。

「は、はいっ！」

「僕達を通ったら扉を閉めろ」

「はい！ って何かありましたか？」

呑気だ。

だから使えない。

「「非常事態だ」」

気付けば同時に口にした。

哀しいかな。

同期なだけあって、行動が似ている。

似てしまった。

まあ、かつては同じ人の部下だったのだ。

きっと彼の癖を受け継いだのだろう。

そう言うことにしておこう。

後数歩。

安全が確保される。

そう思うと酷く安堵した。

黒い海に埋もれながら

「暇だねえ。チタニア、オベロン。何か面白いことを見つけてきてよ」

「無理です」

「めんどくさいです」

使えない使用人たち。

私は退屈なんだ。

「ミランダ、ウンブリエル、クレシダ、ロザリンド、誰でもいいよ。面白いこと見つけてきてよ。酷く退屈なんだ」

姿を現さない家臣たち。

全く。

退屈だ。

「もういい。何か甘いものが食べたいな」

「はい、直ぐにご用意いたします」

そう答えたのはロミオ？ ジュリエット？ どっちでもいい。
いや、ロミオはいなかった。

どうせみんな顔を出さない。同じことだ。

「ステイファノー、君だけだよ。顔を見せてくれるのは」

私の執事は有能だ。

使用人をたった一人で纏めている。

私はクレッシェンテの伯爵の中で最も多くの使用人を持つ伯爵だ。
ナルチーゾは平和で豊か。

殺しなんて生臭い話は他の領土に任せてある。

とにかく二十七人の使用人の中で顔を見せるのはステイファアーの

だけだ。

「葡萄酒を持って来てよ」

「はい、只今」

「ウラーノ様、ジャンドウーヤをお持ちしました」

「ありがとう。ああ、ステイファノー、葡萄酒は止めたよ。カフェラッテを持ってきてくれ」

「はい」

どうもこの城にいと食えること以外の楽しみが無くなる。
困った。

このままではこの完璧な体型を維持できなくなってしまう。

「暇だ。何か芸術品でもあるのなら話は変わるのだけどねえ。ああ、そうだ。ジュリエット、花の女神の情報は入ったかい？」

「先日シエスタから戻られて、現在はムゲットで公演中ですよ」

「そう。ナルチーゾにも来るかな？」

「おそらく」

声だけ。

つまらない。

こんなに可愛いらしい声をしているのだから、姿も見せてくれれば
良いのに。

つまらないな。本当に。

「そういえば、王都はなにやら騒がしいですよ」
「ん？」

今の声は誰だっただろうか？ ああ、思い出した。ロザリンドだ。

「魔術師が騎士に終われているそうです」

「いつものことだよ。ロザリンド。気にしてはいけない。そして、
面白くは無い。それより面白いことを考えたんだ」

「面白いこと？」

視線が集まる。

心地よい。

闇から向く視線は皆私の考えに注目している証だ。

「ジュリエット」

「はい」

「ロミオを探してきてよ」

「は？」

確か遠い異国の芝居だ。

ジュリエットにはロミオがつき物だつてスペードが言っていた。

そうだ、初めてジュリエットを紹介した時に、彼は面白そうにそう口にした。

「君のパートナーだ。最も、新しい使用人はこれ以上要らない。でも、道化師とかそう言うのだったら欲しいな」

既にトリンキュローがいるけれど、彼は全く姿を現さないからつまらない。

どうして私の使用人たちはこうも姿を現してはくれないのだろう。

「ムゲットに行こうかな」

「領地を空けてよろしいのですか？」

「構わないよ。ここには使用人が沢山いる。少しくらいあけても、誰かがしっかりと護ってくれるさ」

とりあえずジュリエットとロザリンドを連れて行こうか。

まあ姿が見えないから居ても居なくてもあまり変わらないのだけど。

「久しぶりにセシリオに会いに行こうかな。ああ、そういえば娘を拾ったとか面白いことを言っていたよ」

「拾った？ 娘を、ですか？」

「ああ。彼の考えることは良く分からないからね」

ああ、そうだ。

面白いことはムゲットにある。

だって、あそこは個性的な人間達の集まりだ。

「荷造りをしてよ。明日にでもムゲットに向かうからさ」

「はい」

今度は誰だっけ？

もういいや。

顔を見せない使用人より、ムゲットの親友だ。
ムゲットには光がある。

こんな薄暗い城とは違う。

早く明日にならないかな。

なんて、少し子供っぽいかな。

夕暮れの墓場に一人佇む

「「あ」「

声を発したのは二人同時だった。
まさかこんなところで会うとは思わなかった。

「墓参りか？」

「うん」

俺が用のあつた墓には既に紫の薔薇が添えられている。
玻璃の仕業だ。

「シルバ、か？」

「うん」

でも、これで最後と玻璃は言う。

「最後？」

「うん。もうここには来ない」

「何故だ？」

「だって、ここにシルバは居ないもん」

地獄に居ると何時だか玻璃が言っていたのを思い出す。

「地獄に行ったらあえるから、ここに来なくてもいいの」

「ほう」

地獄というのが嫌な響きだ。

そういえば、冥府、黄泉とか言う冥界を、玻璃の居るディアーナの連中は忌み嫌う。

「私は女神様の所にはいけないから、きっと地獄に行くの」

「そうか」

「うん」

「リリアンは、どうだろうな」

思わず口に出してしまった。

「リリアンはいいい子だった？」

「ああ。たまに悪戯はしたが、まあ、いい子だったな。この国じゃ珍しい。一人も殺さずに死んでいったよ」

「ふうん。じゃあ、きつとカンガル―が何かに生まれ変わる」

「は？」

「うん。カンガル―がいいな。ぴよんぴよん跳んでカッコいい」

お前は人の妹を何だと思ってるんだよと言いたいが、玻璃自身、本気でカッコいいとか、自分が生まれ変わったらそれになりたいとか考えているだろうから無駄だ。

「俺はどうだろうな？」

「死んだ後？」

「ああ」

「心配なの？」

「まあ、そうなるか？」

不安がないと言えば嘘だ。

死んだ後のことなんて分からない。

死んだら停止して土に還る。そうかもしれない。

そこで思考もぶつつり切れて何も無かったことになるかもしれない。

けれども、死んだ後にもしそと言った迷信的な世界があるなら俺はどうなるのだろうか？

死んでみなければ分からない。

「だったら連れて行ってあげる」

「は？」

「一緒に地獄に連れて行ってあげる」

「地獄かよ」

「二人一緒なら怖くない、でしょ？」

子供っぽい考えだ。

けれども、なんとも玻璃らしい。

「んじゃあ、玻璃、俺より長生きするなよ」

「え？」

「じゃなきゃお前が死ぬまで待たなきゃいけないだろ」

「ああ、じゃあ、アラストルが死んだら私も死んであげる」

発想が子供だ。

純粹で愚か。

けれども、少しばかり嬉しくも思う。

「ばーか、死ぬなよ。生きる。お前はひたすら生きる。リリアンの分も」

「じゃあ、アラストルも生きなきゃ」

玻璃は笑う。

本当に、近頃は良く笑うようになった。

「あ、行かなきゃ」

「ん？」

「仕事。今日ね、壁におっきな絵を描くの」

玻璃は嬉しそうに言う。

「何を描くんだ？」

「龍。おっきな龍。一度描いてみたかったの」

本当に嬉しそうだ。

俺は龍を見たことが無いが、もしかすると玻璃は見たのかもしれない。

「どこの壁だ？」

「王都の外れの森羅風のお屋敷」

「ほう」

聞かなきゃよかった。

もしかしなくても嫌な予感がする。

「依頼主はその屋敷の主か？」

「うっん。代理人」

「そうか。まあ頑張れよ」

「うん。じゃあ、またね」

玻璃は急いで走る。

転ばないかなんて心配をする必要はない。

「シルバはここに居ない、か。無駄足だったな」

玻璃のことは俺に任せてくれ、と頼むつもりだったが、もう、それは叶わないらしい。

「妹を手放したくないのはみんな一緒かあ？」

あいつにとって玻璃は妹のような存在だったのだろう。だったら考えることは同じはずだ。

お前なんかに渡したくない。

俺も同じ気持ちだよ。

そう、告げたくても言う相手が居ない。

二つ目の太陽が沈む。

帰るか。

そう思った瞬間、白い花が目に残る。

俺と玻璃の他にも誰かがここを訪れているのだ。

大きく、それでも上品な白い花と、まだつぼみの小さな花。

二種類の花束が添えられている。

ここに来た誰かはシルバだけではなくリリアンにまで花を持ってきた。

一体誰だ？

辺りを見回しても姿は無い。

「誰だか知らねえけどありがとな」

言わずには居られなかった。

一瞬、木の陰から赤毛が見えた気がしたけれど、直ぐに見えなくなる。

ただ、誰かがそこに居ただけは確かだった。

石に刻まれた文字を指で確かめ

「予言の書？」

ポーチエの言葉に耳を疑った。

「ええ。何でも、リヴォルタが所持しているとか」

ポーチエはお茶を注ぎながら言う。

「ラジエル様も噂は聞くと。ですが、実体が掴めません」

「ラジエルがねえ」

私は奴を染み抜き名人くらいにしか思っていなかったが、どうやらポーチエにとっては尊敬の的、らしい。

まあ、確かに研究部でもずば抜けた知性を持ち、宮廷大博物館の全てを管理する館長だからおかしな噂を知っていても不思議ではない。

「それで？ 噂の出所は？」

「それが、先日競った棺に彫られたそうです」

ポーチエは私にティーカップを出す。

「陛下のお耳には？」

「いえ、まだ」

「ああ、陛下には言わない方がいいだろう。これは我々の判断で処分するべきだ。ユリウスにも伝えておこう」

「はい。ああ、ウリエル様が先程、予言の書に心当たりがあると言っ
て出かけられました」

「ウリエルが？」

まあ、近頃は囚人を殺しすぎて暇になったのだろう。刺繍以外にすることがないからその口実に使ったに違いない。

「リヴォルタがもし所持していなければ、ディアーナやハデスも動くだろう。貴族達も動くかもしれん。いつ裏切るか分からん奴もいるだろう」

「まさか」

「それだけこの国に与える影響は大きいでしょう」

棺に彫られた文字が悪戯という可能性は無いのだろうか？

「ラジエルはどこに？」

「今日は図書館の棚換えをするとおっしゃっていました」

「分かった、手伝う不利をして邪魔してこよう」

「素直に手伝って下さい」

「ラジエル！ 丁度いい」

「ラファエラ、貴女『上司からの求婚を断るとんでもない55の手段』返却期限は昨日でしたよ」

「すまん。ユリウスに持っていていかれたからてっきり返却してくれたのだと思ったが」

「……全く、騎士団長も何を考えているのやら」

ラジエルはあからさまに大きな溜息を吐いた。

ラジエルは騎士団の化石だ。

恐ろしいことにアルジズ前騎士団長よりも前から騎士団研究部に居るらしい。化け物だ。

「私はお前が考えていることが理解できん」

「いやあ、世代の壁ですかねえ」

呑気に言っが、眼鏡の奥の視線は鋭い。

「それで？ 今日中に返却してくださいますね？ 騎士団長補佐」

「ユリウスに言ってくれ。私はもう今日はあの面を見たくない」

自分の同期が壊れたなんて認めたくない。

「ソプラニーノのチョコレートケーキで手を打ってあげても良いですよ」

「……お前、一番税率の高いものを……」

「国への貢献です。陛下の為になるでしょう？」

「巡り巡って自分の給料になるかと思うと酷く嫌なサイクルだ」

まあ、買いに行くのがめんどくさいだけだが。

「あの店、並ぶんだよな」

「その腕章を見せれば直ぐに入れるでしょう?」

「……それはユリウスしか使わん手だと信じていたが?」

宮廷騎士特権、とユリウスはいつも言っているが、職権乱用だ。

私はそんなことはない。

「相変わらず石頭だねえ。ラファエラは。まあいいや。予言の書の

ことは今、僕とポーチェと君しか知らない。最も、この王宮では、
の話だ。酒場辺りで情報収集を頼みたいのだが、空きはあるかね?」

「私は、三日ほど休暇だ」

「丁度いい。潜入してくれるかえ?」

休日返上で仕事しろと。

「陛下の為になるなら」

「勿論、他の連中より先に予言の書を手に入れることは陛下だけでは
ない、王族全体の有益に繋がる」

「都合の悪いことがあれば、抹消できますからね」

「なるほど」

まあ、ユリウスから離れる口実も出来る。私にとっても損ではな
い。

「棺には何て彫られていたんだ?」

「いや、『不吉ナ予言ヲ決シテ外ニ洩ラシテハナラヌ』とだけだ。

予言は不吉なんだよ。ラファエラ」

ラジエルは面白そうに言う。

「それで?」

「もしかすると暗殺か何かに関するものかもしれないからね。急が
ない」

面白いことになってしまつと彼は言う。

「あの棺、面白いんだ」

「は?」

「陛下の生まれた日に作られている」

「馬鹿な」

「いや、本当に。追跡魔法でも使つて鑑定してみなよ」

「私には使えない」

「ああそうだった」

ラジエルは本当に面白そうだ。

「私には何か起こってくれた方が面白いけれど、君は違う。何も起きない方がよいのだろうか？」

眼鏡を外すラジエルの視線の先に何かあるかは分からない。

「何も起きない方がよい」

「うん。模範解答だ」

満足そうに、彼は白衣の胸ポケットに伊達眼鏡を仕舞う。

「ラジエル」

「ん？」

「情報収集はいいが、誰に接触する？」

「ウラーノ・ナルチーゾ辺りが良いんじゃないかい？ 彼は、退屈になると何にでも手を出すからねえ」

絶世の美女に化けてお行きと言いながら、ラジエルは部屋を出てしまう。

「ポーチェ」

「はい」

「絶世の美女、とはどんな面だ？」

「さあ？ 少なくとも「面」などという言葉は使わない人のことを指すと思います」

「同感だ」

正式な任務でないにせよ失敗は許されない。

「ポーチェ」

「はい」

「部屋を貸してくれ」

「へ？」

「ユリウスとあの女に邪魔をされれば全ての計画が狂う。あと、満腹にごはんをあげて欲しい」

「満腹？ ああ、あの子ですね」

「頼む」

ケーキを買いに行くところから演技が始まる。

そう思うと少しばかり気が重いが、やむを得ない。

予言の書は何が何でも宮廷が手にしなくてはいけないのだ。

たった一つ、遺されたもの

噂には聞いていたがまさか自分がそれを目にするとは思わなかった。

- 自分探しの旅に出ます。探さないで下さい -

一瞬夢だと思った。

それ以前にくだらないうんたんと。
が、部屋を見ればいない。

「アンバー、あの馬鹿娘を連れ戻してきなさい」

「は、はいっ」

うちの馬鹿娘。瑠璃は典型的な家出をしてくれた。

いや、本当に馬鹿でしよう。

何が自分探しの旅だ。

ありえない。

人生は常に路頭に迷う勢いでしように。

本当に馬鹿娘だ。

「瑠璃」

「何？」

「あの馬鹿娘を見ませんでしたか？」

「馬鹿娘？」

瑠璃は不思議そうに首を傾げる。

「瑠璃です。瑠璃。あの馬鹿娘はこの大掃除を放り出してどこに行つたのだから」

ああ、苛々する。

朔夜も玻璃もいい子だから積極的に手伝ってくれているというのに。

まあ、玻璃は本体ではなく呪詛が床掃除をしているので家の中が常に危険に晒されているのだが。

正直この子は遊んでいてくれた方が助かるがまあ、手伝うという気持ちがあるだけ良い。

「死んでないから平気」

玻璃の答えは簡潔だ。

どういうわけか二人は謎の電波で繋がっているらしく、命の危機が分かるらしい。

瑠璃曰く「愛の力」らしいが疑わしい。

「玻璃、掃除はいいので瑠璃を連れ戻してください」

「嫌。朔夜のお手伝いしたい」

「……瑠璃を連れ戻すことが最大のお手伝いです」

祭りの買出しに行かせようと思ったのにどこで遊んでいるのやら。都合が悪くなると直ぐに姿を消す。

「マスター、すみません、手伝ってください」

「どうしました？」

「ジャスパーに屋根裏の掃除を頼んでしまったので、棚の上に届く人が居ないの」

「……それは僕に対する挑戦ですか？」

僕と朔夜はさほど身長が変わらない。

あの子は育ちすぎてしまった。

「マスターなら、届かなくても拭く方法があると思ったのだけど、無理かしら？」

「僕はそこまで化け物ではないつもりです」

踏み台は少し前に瑠璃が暴れて壊してしまった。

「ジャスパー待ちですね」

「仕方ないわ。待ちましょう。それより新年のお祭りなんだから、少し良いお酒も用意しましょうか？」

「是非」

朔夜は気が利く。

何故この朔夜に育てられた瑠璃はあんな風に育ってしまったのだろう。

「お料理は何が良いかしら？」

「玻璃の好物を用意してあげてください」

「ええ」

「瑠璃には何も用意しなくて良いです。あの馬鹿娘は」

「マスター、落ち着いてください。瑠璃ちゃんはいつものことでしよう？」

駄目だ。

朔夜は慣れすぎて問題視していない。

「僕だつてただいなくなるだけなら何も文句は言いません。いつものことですから。ですが、あのふざけた書置きは何ですか！」

思わず大声を出してしまった。

「仕方ないでしょう。マスター。あの人はそう言う人なんですから」
屋根裏掃除を終えたジャスパーが降りてくる。

「直ぐに玻璃様が連れ戻しますよ。ほら」

彼の言葉と同時に、足元から呪詛が現れる。

「玻璃！ こいつら何とかしろ！」

見事に黒い頭に足や腕を噛まれた瑠璃がいる。

これは、大丈夫なのだろうか？

「瑠璃にはこの呪詛は感染しないのでしょうか？」

「平気。直ぐ治すから」

玻璃は冷静だ。

「朔夜のお手伝いになった？」

「え、ええ……でも、放してあげて？」

朔夜も驚いているらしくいつもより反応が鈍い。

「アンバーは？」

「チーズを買いに行ってもらったの。お祭りでしょう？ いつもよ

り美味しいの」

玻璃は祭りを美味しいものが食べられる日くらいにしか思っていないのかもしれない。

が、買出しの手間が省けた。

「ありがとうございます。では、戻った瑠璃には説教をするとして、玻璃、花を買ってきてくれますか？」

「うん」

玻璃は家の中に置いてはいけない。掃除が終わるまで。

「朔夜、ジャスパー、掃除は頼みました。瑠璃、地下に来なさい。話があります」

そう告げれば既に呪詛から立ち直っていた瑠璃の顔は青くなるがそんなことは知らない。

悪い子には説教を。

部下の、いや、娘の教育は徹底しなくてはいけない。

おそらく今までが甘すぎたのだ。

「瑠璃、これからは僕も心を鬼にして徹底的に躾けるよう努力します」

「いい！ もういい！ アンタ最初っから鬼だから！」

「ほう、僕は鬼ですか。では、地獄を見せてあげましょう」

地下でどのくらい二人で過ごしたかは分からないが、居間に戻った頃には月が昇っていた。

瑠璃だけではなく、何故か朔夜とジャスパーまで顔が青かったことが不思議でならなかった。

剣

「師匠、今日は何を？」

「今日は薬の調査をするのだけど、興味はないかしら？」

「いえ、とても楽しみです」

懐かしい夢を見た。

あの子の夢。

昔は素直で可愛かったのに、

今はどうしてあんなにも虚ろなのかしら。

「スピード」

「……何か用ですか？」

睨まれる。

それが師に対する態度かしら？　と言ってやりたいけれど、そう言えば彼はさらに不機嫌になるだろうからやめておく。

「元気かしら？」

「すこぶる健康です」

「そうじゃないわ。最近楽しいことはあったの？」

「そうですね。賭けでばる儲けです」

「そういう意味じゃないわ」

「では？」

彼はめんどくさそうに私を見る。

切れ味が悪くなったのでは？

既にさび付いてしまっているのでは？

そう思わずにはいられない。

「一緒にお茶でもどうかしら？」

「僕は忙しいのでお断りします」

「そういわずに。とても美味しいケーキを出すお店があるの」

「甘いものは嫌いです」

「あら？ あんなに好きだったじゃない」

「何時までも子供ではありません」

その言葉に酷く突き放された気がした。

「そ、そうよね……ごめんなさい」

私にはずっと子供に見えるのに、この子はそうじゃない。

腐った微温湯の中で時間を止めている。

この子はもう、可愛かったカトラスでは無い。

道を踏み外してしまった魔術師、スペード・J・A。

ああ、あの子が去ってしまう。

引きとめよう、そう思っただけで出来なかった。

何時までも子供ではない。その言葉が鋭く突き刺さる。

もう、あの子は私が愛したあの子ではないのだ。

「師匠、どうです？」

「うーん、少し煮すぎかしら。でも、初めてにしては上出来よ」

「初めてにしては、ですか」

「落ち込まなくていいわ。実は、私はこの薬を初めて作ったとき、分量を間違えちゃってね、それは綺麗なピンクになっちゃったの」

「師匠が？」

信じられないとカトラスは私を見た。

「血の色にならなきゃいけないのに、よ？ 誰にだって失敗はあるわ」

「僕にとって貴女は常に完璧な魔女です」

「まあ、嬉しいことを言ってくれるのね」

これは幻影？

私の一番幸せだった時間。

「師匠、週末は王都まで出かけませんか？」

「王都に？」

「実は、この前の報酬で少し買いたいものがあるんです。折角ですから師匠と一緒に行きたいと思ひまして」

「まあ、甘えん坊ね。カトラスは」

息子のようにだった。

そう、何百年も前に失くした息子が戻ってきたような、そんな感覚だった。

「まだ若いんですから、ね？ たまには良いんじゃないですか？」

「あら、私のことを出会い頭に婆呼ばわりした貴方がそんなことを言うようになるなんて思わなかったわ。何か企んでいるの？」

「まさか。昔のことは忘れてください。若さゆえに愚かだったんです」

「ふふつ、冗談よ。じゃあ、お相手はカトラスにお願いしようかしら」

「喜んで」

孫のようで、息子のようで、恋人のようだった。

そう、あの人が戻ってきたような、そんな感覚。

けれど、この子も同じだった。

「師匠は本当に歳を取りませんね」

「気味が悪い？」

「まさか、素晴らしいことです。僕も師匠のようになりたい」

「止めなさい。こればかりは、決して許されない罪なの」

「何故？」

「全てを失うわ。大切なものを全て」

膝の上から毛糸が転がる。

その瞬間、カトラスが私を見る目が変わった。

「最後の最後に出し惜しみですか？」

「え？」

「僕にはその秘術を教えたくない」と

「秘術なんか無いわ。呪いよ。私の一番恥じるべき行為だったの。

貴方には、教えたくないわ」

私が愛を注ぎ続けた可愛いこの子に、あんな愚かな真似をさせた
くない。

「何故です！ 僕は貴方の弟子ではないのですか！」

「私の弟子だからよ」

あの子は出て行ってしまった。

もう、それきり顔を出してくれなくなった。

それからしばらくして、緩やかながらも歳を重ねていたあの子が
時間を止めてしまった。

ああ、同じ罪を犯してしまったのだろう。

そう思った。

酷く胸が痛む。

まるで、切り裂かれたように。

最初で最後の弟子は、私の最後の養子^{むすこ}で、私の唯一の弱点となっ
た。

歪んだ世界と罅割れた感情

この国の罪は感情で決まる。

たとえば、国民に決めさせよう。

罪人が気に入らない人物であれば死刑。

明らかに罪を犯していても、自分の利益になる相手ならば無罪。
正義なんてそんなものだ。

ミカエラ・カアーネは諦めた様子で溜息を吐いた。

今日もあの恐ろしい男に罪人を引き渡す。

この男は何をしでかしたのだったか、すでに思い出せない。

「こんな国は滅びるぞ！」

「良かったじゃないか。その前に死ぬるんだ」

叫ぶ男にそう言ってやると男は怯えた様子で彼女を見た。

慣れている。カアーネは自分に言い聞かせた。

自分は犬だ。

それ以上でも以下でもない。

「ウリエル」

「ああ、カアーネか」

「今日はこいつだけだ」

「少し溜めておいてくれないか？ 処理が追いつかん」

罪人の男を引き渡せば、目の前の男は溜息を吐く。

カアーネは彼を睨んだ。

「監獄も一杯だ」

「ならば無罪を増やせ」

「……それは私が決めることではない」

そう、国民の感情が、そして国王の感情が罪を決める。

「陛下があを面を気に入らないと言えは死刑、陛下が髪の色を気に入ったと言えは無罪。ここはそんな仕組みだ。最近陛下に気に入られる奴が居ない。それだけの話だ」

カアーネの言葉に男は再び溜息を吐いた。

「この国は終わる」

「何？」

「終わるのだよ。カアーネ。そして私も」

彼は静かに言う。

「カアーネ、鼻は利くか？」

「当然だ」

「ああ、そうだ。お前はカアーネなのだから」

彼は静かに言って罪人の男を引きずって歩き始めた。

「待て」

「ん？」

「貴様が終わるとはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。私は、陛下の為にあるのだから」

彼はそう言って長い廊下の果てへと消えた。

この国の感情は読めない。

この国の未来は読めない。

この国に罪など無い。

この国に正義など無い。

カアーネは「犬小屋」と呼ばれる自室へと向かう途中、女王の肖像画を見た。

狂おしいほど美しく、朽ち果てたかのような寂しさを感じた。

鉄の味

朝なのか夜なのか分からないこの地で、プルトーネ様のお茶の用意をするのは私の仕事だ。

ローザの薔薇はお茶としても活用されるが、赤く染まる前に摘まなくてはいけない。

「……鉄の味がしますね」

もう、このあたりの薔薇は駄目だろう。

血を吸いすぎている。

もう少し城の傍の花を選ぼう。

白い花を選ばねば。

赤く染まっては敵兵の味になる。

プルトーネ様にはふさわしくない。

いくら世間が血を啜る魔の伯爵と呼ばうともあの方ほど純真で臆病でお優しいお方は居ないだろう。

―カロンテ―

声が響く。

―忘れるな―

忘れていませんとも。

「我々は、領土を預かるもの。この国を護ることが、このローザを

護ることがプルトーネ様、そして私の使命……」

神無き国とは誰が言ったのだろう。

その意味を知るものはや伯爵とその従者のみだろう。

―異邦者を護れ―

―新王を探せ―

今頃プルトーネ様もこの声を聞いている。

まもなく、だ。

あの幼い女王は王位を失う。

まもなく、あの女王の椅子に違う誰かが座る。

けれども、我々は変わらない。

ただ、留守を護るだけ。

留守を護るためだけに存在するのだ。

「さて、お茶の時間ですね」

白い薔薇は赤く染まる。

プルトーネ様の心まで赤く染まらないことを祈ろう。

そうでなければ、あの方は純真でなければ留守を護ることなど出来ないのだから。

焼け付くような

私は昔から写真が好きだった。

一番良い位置で、誰よりも目立ちたかった。

私は、いつか大女優になってハリウッドで活躍する、はずだった。

「薫」

「何？ 望姉さん」

「なんでアタシ、ここにいいのかしら？」

「そりゃ、姉さんがお椀一杯の塩入れた湯船に潜って108数えたから、でしょ？」

「ねー、あれってさ、悪い夢見ないお呪いだって聞いたんだけど」
ひりひりして痛かったけど言えば薫は呆れた顔で私を見る。

「望姉さんってさ、呪いとかそーゆーの嫌いじゃなかったっけ？」

「迷信とか？ 嫌いって言えば嫌いだけど、なーんかやってみたく
なるんだよね。なんか、こう、好奇心を刺激されるって言うか」

アンテナ高くなきゃ芸術家にはなれないんだい！ 叫んでも薫の
反応は薄い。

「あんたって可愛くないよね」

「ありがとー。うれしーな」

「褒めてないって。あんた、アンテナ低そうだし」

「うつさい。私は望姉さんと違ってサイボーグじゃないからアンテナ無いの」

「誰がサイボーグどころ」

軽く小突けばコンッと良い音が鳴る。

「何をしているんですか？」

不機嫌そうに屋敷の主が起き上がる。

そう、我々は主様の部屋で寝顔を眺めながらこの下らないやり取りをしていたのだ。

「不機嫌そうだね、ご主人様」

「うるさい……僕はまだ眠い」

「どうぞお休みなさいませ。じゃ、あたしそろそろ戻るわ」

「ね、何しに来たの？」

呆れ顔の薫。

そりゃ決まってるじゃない。

「あんたのその顔見に来たのよ」
なんてね。

知り合いが少なくて寂しいの。

みんなばらばらなんだから。

薫はこの屋敷のに、宙は赤毛の彼の家に、武は銀の彼の家に。

そう広くも無く狭くも無い王都の端に薫は居て、あとの二人は大聖堂付近だ。

そういう私は王宮付近。

会いたいと思えば会えるけれど、偶然会う確率はそう高くは無い。
だからこそ、こつやつて目に焼き付けたい。

「望姉さん、寂しいの？」

「え？」

「あ、いや、なんかそう思っただけ」

「別に。私には私のご主人様が居るから寂しくはないよ」
首輪つきのなの。私。

そう言つと薫は微かに笑った。

「似合いすぎ」

「そりゃどうも」

「褒めてないよ」

中華風の広い屋敷を出れば、猫が居る。

まーおと鳴く猫は随分と凜々しく見えるものだ。

「帰ろうか、満腹」

猫はめんどくさそうに返事して、私より先に歩き出す。
ああ、猫にまで裏切られるのか。
そう思うと少しばかり寂しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5389w/>

クレッシェンテお題短編集

2011年11月29日23時45分発行